

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.167

2007年4月

平成18年度卒業式を挙



目次

●ニュース	
平成18年度卒業式を挙	3
産業技術総合研究所と連携・協力協定を締結	8
平成18年度エネルギーに関する文理融合研究合同成果報告会を開催	9
平成18年度事務職員の海外研修報告会を開催	10
平成18年度名古屋大学総合技術研究会を開催	10
「教育の質的改善をめざす全学シンポジウム」を開催	11
卒業・修了留学生を送る夕べを開催	11
第11回経営協議会を開催	12
第27回防災アカデミーを開催	12
学校教育法等の改正に伴い教員の職名が変更	12
●知の未来へ	
瓦礫の山から歴史を読む	13
梶原 義実（大学院文学研究科講師）	
●知の先端	
有機合成化学の壁に挑む：逐次合成法から連続合成法へのパラダイムシフト	14
石原 一彰（大学院工学研究科教授）	
●学生の元気	
平成18年度名古屋大学総長顕彰 2名1団体表彰	16
●部局ニュース	
公開シンポジウム「拡張し変容する『日本語』」を開催	17
平成18年度教育学部附属学校卒業式を挙	17
シンポジウム「経済学、経営学の基礎力、応用力とは何か」を開催	18
情報科学研究科が基盤研究公開セミナーを開催	18
公開セミナー「新しい癌治療法の開発を目指して」を開催	19
21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解読」	19
第1回名古屋国際冬の学校を開催	
「大学教育改革フォーラム in 東海2007」を開催	20
「防災フェスタ2007 in 名古屋大学」を開催	20
シンポジウム「バイオウエイストのリファイナリー型資源化」を開催	21
IODP 大学&科学館キャンペーン講演会を開催	21
●環境への取り組み	
身近なところから環境問題を考え行動する	22
●名大を表敬訪問された方々 平成18年12月16日～平成19年3月15日	23
●新任役員・部局長等の紹介	23
●資料	
平成19年度名古屋大学組織図	27
●受賞者一覧	28
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年2月16日～3月15日	30
●イベントカレンダー	34
●ちょっと名大史	
名古屋帝国大学初代総長澁澤元治関係資料	36

平成18年度卒業式を挙





春の訪れを感じさせる穏やかな晴天に恵まれた3月23日(金)、平成18年度名古屋大学卒業式が、愛知県体育館において挙行されました。例年は、豊田講堂で式典を挙行していますが、2年後に本学が帝国大学として創立70周年を迎える記念事業の一環として、同講堂の改修・増築を行っているため、本年に限り、愛知県体育館での挙行となりました。

今回は、会場が広いことから、例年別々に行っていた学士学位記授与式と修士・博士学位記授与式を合同で行い、会場は卒業生、修了生及びその付添者で満員となりました。

午前10時、名古屋大学交響楽団が演奏する「ニルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、来賓の方々が見守る中、平野総長から学部卒業生2,202名に学士学位記が、修士課程及び博士課程前期課程修了生1,518名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生65名に専門職学位記が、また、医学博士課程及び



博士課程後期課程修了生297名に博士学位記がそれぞれ授与されました。

平野総長は、大きく開かれた将来へのスタートラインに立つ卒業生及び修了生に対し、送別のことばを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、医学部卒業生の小山大輔さんが卒業生総代として、大学院生命農学研究科博士課程前期課程修了生の藤井泰志さんが修了生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の岡部 弘氏(株式会社デンソー代表取締役会長)より心のこもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

その後、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍の光」を全員で合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

卒業式終了後には、愛知県体育館前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、付添者などと記念撮影をする卒業生、修了生の姿があらこちらで見られました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ(http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/h18_grad.html)で視聴することができます。

総長の辞

平野 眞一

名古屋大学は、本日ここに、平成18年度学部卒業生2,202名に学士学位記を授与いたしました。また、平成18年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,518名に修士学位記を、大学院専門職学位課程修了者65名に専門職学位記を、医学博士課程及び博士課程後期課程修了者297名に博士学位記を授与いたしました。皆さんに本学の役職員を代表して、心より、洋々たる将来に向けての船出をお祝いいたします。大学での勉学を糧に、希望に満ちて新しく旅立ちされる皆さんをお送りすることは、私どもにとって誇りであり、喜びであります。

例年は、名古屋大学のシンボルである豊田講堂で式典を挙行しております。しかし、豊田講堂は建設されて45年以上になり、2年後に本学が帝国大学としての創立70周年を迎える記念事業の一環として、改築・増築工事をトヨタ自動車株式会社及び関係会社のご理解により進めておりますので、本年に限りここ愛知県体育館で式典を執り行っております。

皆さんは、社会に出られる方、大学院博士課程前期課程または後期課程へ進学される方とそれぞれ異なる道を歩まれますが、一つの課程を修了できたという達成感と、これから始まる新しい生活への期待感に満ちた澁刺とした気持ちが私にも強く伝わってきます。明るく、大きく開かれた将来へのスタートラインに立たれている皆さんに、心から拍手をお送りします。

今日を迎えるにあたって、名古屋大学に入学したときの心意気や、また在学中の出来事を思い出していただいましょう。名古屋大学での学生生活は、充実したものでありましたか。若き日のこの貴重な時に多くのことを学ばれたことでしょうか。在学中に得た「友人」と「学問」は皆さんの財産です。大切にしてください。

皆さんの将来に期待して、激励の言葉を贈りたいと思います。

皆さんは、在学中に、活用できる学力を身につけ、また学問のあり方、学び方を身につけるとともに、先導的な学術研究の一翼を担い、学術の進歩に貢献して下さった方々であります。20世紀以降、学術・科学技術は目ざましい発展をしてきました。あなた方の努力によって、さらに一歩進歩したはずであります。将来とも発展していくでいきましょう。

とはいえ、現在、学術・科学技術が迫られている課題はいよいよ明確になってきております。20世紀は、科学技術において特に大きな進展があり、物質的には豊かさを享受できるようになってきました。しかし同時に、人とのイン



ターフェース、精神的・文化的な配慮が十分ではなかったことは否めません。21世紀にあつては、学術・科学技術は「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御して、全地球規模での安心・安全で持続可能な発展を図ることが最も重要な課題であり、私たちは、その実現に努めなければなりません。

現在は残念ながら、政治、経済においても、また市民生活のなりわいにおいても、システムが崩壊してきております。物質的・経済的側面に偏ることなく、精神的・文化的側面にも充実したバランスのとれた人間性豊かな人が軸にならねばなりません。皆さんは、それぞれの分野において、ある一つの観点から物事を深く追求して、その成果を論文に纏めてきたでありましょう。学問が急速に深化し、分化しつつ発展している一方で、社会においては様々な問題に直面します。どんなに状況が変化しても変わらない学問の基礎をもとにして、総合的に問題を解決する力を今後とも磨きながら、新しいことに立ち向かってください。

本日学位記を授与された皆さんの中で、233名の方が留学生であります。この方々は、国を離れ、言葉や文化が異なる我が国で、将来の自国への貢献、世界への貢献を志して困難な環境の中で努力して、本日の栄えある日を迎えられました。本学では、毎年約1,200名の留学生が学んでおられます。キャンパスは、小さな地球でもあります。教室で、また研究室で、色々な形で交流がなされていたと思います。国内外の学生が一つのキャンパスで過ごし、互いの文化や考え方を理解できたことは、皆さんの将来における重要な財産です。地球上の資源が有限であるという観点からすれば、また地球規模での環境対策から見ても、一国でことが成就する状況ではありません。グローバル化していく世界の中で、各国は主権を大切に、お互いがしのぎを削りながら、かつ地球規模的な問題については協調して問題を解決していかなければなりません。そのためには、それぞれの国の歴史、文化、宗教を尊重しあうことが前提でありますし、加えて、常日頃の学習に裏打ちされた自信と客観的

な判断力を身につけなければなりません。多様性を尊重するとともに、かけがえのない自分であること、存在感のある個人であることが尊ばれる社会となるように皆で努力しなければなりません。

今からの社会は、若くて活力ある皆さんが築いていていただきたい。新しい世界を創るのは皆さんです。責任感ある若い方が目立って良い社会にすべきでありましょう。そのような社会をリードするには、実務能力に加えて、人間性の観点から「選ばれた人」が必要であります。また、「選ばれた人」には、責任と義務が生じます。皆さんには、人間を信じ、愛する能力を養って、それぞれの分野で、社会をリードする「選ばれた人」になってもらいたい。皆さんには、どの分野に進もうと国際的な感覚を常に磨いて異文化を理解しあい、対等な立場でお互いを尊重しあって共存する世界観を持ってもらいたい。そのための意見交換の道具（コミュニケーションツール）としての語学力を身につけてもらいたい。

皆さんが、グローバル社会の中で生きていくための世界観を身につけられることを希望します。常に、世界で起きていることを敏感に捉えて、世界の動きを、勇気をもって注視してもらいたい。特に、その国の文化、歴史を尊重して、お互いの立場を理解しあってもらいたいと思います。国際社会で相互交流するためには、同時に、自分の国の文化を学んで接すること、自分が依って立つ基盤を大切に、すなわち自分の存在意義「IDENTITY」を確立してもらいたい。社会は様々な異なる文化、異なる宗教、異なる価値観を持つものが共同、協調して構成するものであります。多様性を尊重するとともに、人の痛みが分かる、相手の立場で物事を考えるように努められることを希望します。

名古屋大学の卒業生は、漢字の「実」の字がよく当てはまる、と言われます。「実直」、「実行力」、「実力」、「誠実」など誉め言葉を頂いておりますが、一方では「組織をリードする覇気が弱い」とも言われております。高く評価されている点は真摯に受けとめて、驕ることなく、しかしその特長を大切に、そして直すところは努力して直してもらいたい。名古屋を評して言われる「愚直さ」は恥ずかしいことではありません。実質を重んじて行きましょう。周りから必要とされる人間、組織から「貴方がいないと困る」と言われる人となられることを期待しております。

また、皆さんの引き出しに入っている知識を融合し、活用してください。チャレンジ精神を今後とも失うことなく、自分に投資し続けてください。自分への投資は、環境の変化があっても失われることはありませんし、越えなければ

ならない壁にぶつかった時ほど、大きな力を発揮するものです。「高い志を持ちましょう。その実現に向かって進みましょう。」若いときは、自分の夢に自信が持てないかもしれないし、また不安でありましょう。それは、可能性が秘められていることへの証でもあります。精一杯、高い志を持ち続け、自分が自分に真摯に対峙すれば、夢が現実のものになります。夢の実現に結びつく「目標設計力」を磨き続けましょう。

とはいっても、壁にぶつかって自分を見失いそうなどきがあるかもしれません。そのような時は「ちょっと立ち止まって自分を振り返る」ことも必要でありましょう。私は、そのときにはいつも相田みつをさんの「肥料」という題の詩を思い返しています。

「肥料」

あのときの あの苦しみも あのときの あの悲しみも
みんな肥料に なったんだなあ
じぶんが自分に なるための

チャレンジ精神を失わずに、前を向いて着実に進みましょう。

将来を担うのはあなた方です。皆さんが高い志を持って、胸を張り、将来の人類社会のために頑張ってくれることを期待しております。それぞれの道で、最善を尽くし、活力のある社会を創るために自信をもって活動されることを希望しております。

以上をもって、卒業生、修了生への辞といたします。おめでとうございます。



来賓祝辞

岡部 弘 名古屋大学全学同窓会副会長
株式会社デンソー代表取締役会長



ご紹介に預かりました、名古屋大学全学同窓会副会長の岡部でございます。

皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げたいと思います。そして、本日より皆さんには全学同窓会の会員になっていただくことになる訳でありまして、全学同窓会を代表して心より歓迎申し上げますと共に、一言激励のご挨拶をさせていただきます。

皆さんは既に進路も決まり、新たな気持ちで次の生活の第一歩を踏み出されることと思います。ここ4～5年緩やかながら景気の上昇傾向が続き、少しずつ明るさも増しているとはいえ、不透明な要因も多く、将来に対する確たる展望が描きにくい中で、皆さんも進路の選択には何かとご苦労もあったと思います。この先日本はどうなるのかといったことにも不安があることでしょう。しかし、かつて高名な歴史家が言いましたように、「あるグループの人から見れば没落の過程にあると思われた時代が、別のグループの人から見れば発展の兆しが生まれた時であった」と



いったことが過去の歴史の中には数多く存在したということでもあります。大切なことは、今現在のこの時代をどう前向きに捉えるかということでもあります。

今世の中は大きく変化しつつあり、そのために企業をはじめ多くの組織もこうした変化に合わせ、日々変革の努力を続けております。しかしながら、こうした変化の時代こそ、見方を変えればチャンスも多いと言えます。このチャンスをどうやってうまくつかむか、これが皆さんにとっての大きな課題であると思います。そのために私も先輩の一人として一つだけアドバイスするとすれば、「自らのアイデンティティを明確にし、将来例えば20年先、30年先にいったいどのような人間になりたいかという将来像を描け」ということでもあります。そして将来像の実現に向けて、今から3～5年の期間を区切って、自らのスキルを磨く努力を積み重ねていくということでもあります。

日本はこれから世界的に類をみない人口減少社会に入ります。こうした中で、世の中では個々の政策論ばかりが論ぜられていますが、20年、30年先に日本がどのような国になっていきたいのか、あるいはなるべきであるかという大きなグランド・デザインは残念ながらまだ十分に描ききれていないと思います。そしてそこに、確たる将来展望を持っていない要因があると私は思います。そして、グランド・デザインを描くために、最も大切なことは、「日本のアイデンティティとは何か」ということを考えることでもあります。

日本の歴史・風俗・習慣は、欧米諸国とは大きく異なります。また日本には独自の文化・伝統があります。こうした日本の持つアイデンティティをこれからどう生かすか。もちろん、現在はグローバル社会でありますから、グローバル・スタンダードは尊重しなければなりません。しかし、その上で日本の持つ優れたアイデンティティをうまく生か



すことができれば、たとえこれから日本が人口減少社会となろうとも、より安定した豊かな国作りができるというものです。

そのための重要な課題の一つが「人を育てる」ということだと思っております。特に次世代を担う子供達の教育をどうするか。沢山の問題を抱え混迷の中にある教育制度をどう立て直していくか。要するに、国を作るにはまず人をつくるという考え方が大変に重要だと思います。

日本の企業社会は従来から「人を大切にする」という考え方が強くありました。しかし、グローバル経済が急速に進展する中で、残念ながらこうした考え方は日本の悪しき経営慣習と考えられるようになりました。人は単なる企業の資源の一つであり、必要ならドンドンリストラを行っても利益を上げていく、そういう経営者が高く評価されるようになりました。そうした中で、「ものづくり」はオールドエコノミーであり、ITを中心とした情報・サービス産業こそがニューエコノミーであって、日本も早くそういうところに産業基盤をシフトすべきだということさえ言われています。これはとても残念なことであり、こうした所に実は日本の混乱の要因があるように思われます。

私自身が製造業に属しているからという訳ではありませんが、日本のように資源のない人口大国は、これまでも、そして将来も経済成長の「生命線」は「ものづくり」であると私は信じています。そして大きな揺らぎが確かに見えはじめているとは申しながら、日本の「ものづくり」の強さは国際的に見てもまだまだ大変優位性があります。こうした「ものづくり」の力により一層磨きをかけ、その上で日本の伝統・文化に根付いたソフト・サービスが付け加われば、日本はこれからのグローバル競争に十分勝ち抜くことができると確信しています。そのために大切なことは、

何よりも人を大切にし、そして人を育てるという考え方が必要となります。そしてこうしたことができることが実は日本の強みであり、これからの厳しい状況を勝ち抜く武器にもなると思います。

これから社会に出る皆さんに是非期待したいことは、皆さん自身の明確なグランド・デザインを描いてそれぞれの持ち場・立場で是非チャレンジを続けてほしいということです。「寄らば大樹の陰」と考える人には、これからの社会は住みにくい社会と言えるかもしれませんが、しかしながら意欲を持って前向きにスキルを磨き、チャレンジし続ける人にとっては多くのチャンスがあると思います。そして何よりも皆さんには大きな武器があります。それは「若さ」です。この若さを生かして自らの途を切り拓く意欲があれば、結果は必ずついてくるものです。よく言われますように、「幸福の女神」は、後ろから追いかけてもつかまえない。そうではなく、前に待ち伏せをしてしっかりとつかむもの。そうすると「幸福の女神」がつかまえられるのです。20年後・30年後にこの中から企業を、そして多くの分野で日本をリードする人材、あるいは社会に大きく貢献する人材が数多く現れることを心より期待しております。

本日はまことにおめでとうございました。

産業技術総合研究所と連携・協力協定を締結

3月9日(金)、産業技術総合研究所東京本部理事長室において、独立行政法人産業技術総合研究所(産総研)と、我が国の学術及び産業技術の振興に寄与することを目指して、相互の研究開発能力及び人材等の総合力を発揮し、協力が可能な全ての分野において、連携・協力を実施するための協定を締結しました。

調印式では、平野総長及び吉川弘之産業技術総合研究所理事長によるあいさつの後、協定書に調印し、連携・協力協定を締結しました。

現在、社会を支えている科学技術は細分化、高度化し、個人や単一の機関が全ての分野に研究資源を配分することが難しい状況であり、また、同時に社会の発展を持続するためのイノベーションを、単一の機関のみで進めることも困難です。このような状況下では、多くの機関が得意分野を持ち寄って協力し合うことが、イノベーションを持続させるために有効であり、産学官がそれぞれの特徴を発揮し協力することが期待されています。

本学は、東海地域における知の拠点として、歴史を刻み、人材を輩出してきており、一方、産総研は、経済産業省所管の研究所として、科学的基礎研究と製品の間にある死の谷を橋渡しする研究を実施するとともに、異分野の技術や



協定締結後、握手をかわす総長(左)と吉川理事長(右)

概念の架け橋となり実用技術に繋げる役割を果たすことにより産業技術の発展に尽くしてきています。本学と産総研は、これまで多くの技術分野で協力し、多くの共同研究や学部学生または大学院学生の実験実習等の技術研修を実施してきました。特に、産総研中部センター(旧名古屋工業技術研究所)はセラミックスや軽量金属を始めとする材料開発に特徴があり、地理的な近さもあり緊密な協力関係を築いてきました。

本協定により、これまでの共同研究はもとより、組織対組織における共同研究の推進、研究者の研究交流を含む相互交流、研究施設・設備等の相互利用による戦略的研究拠点の構築、人材育成の推進及び相互支援等を進めていきます。

当面は、エコトピア科学研究所並びに大学院工学研究科と産総研中部センターの間で、「環境」をキーワードとする低環境負荷製造技術、資源循環、環境浄化等の技術について社会科学的な視点を含めた議論を深め、我が国の産業を支える材料を基盤とするものづくりの分野において、それぞれの機関が持つ得意分野を活用しつつ協力して研究を推進する予定です。また、関連する学問分野或いは技術分野の進歩に貢献できる人材の育成にも努めていきます。

今後、更に、お互いが広い分野で協力することにより、技術革新と人材育成を通じて、産学官連携の中核として、イノベーションを推進することを目指していきます。



調印式の様子



懇談の様子

平成18年度エネルギーに関する文理融合研究合同成果報告会を開催



研究合同成果報告会の様子

名古屋大学エネルギーマネジメント研究・検討会及び名古屋大学エネルギー問題研究会は、3月13日(火)、「名大発－省エネ推進と地球温暖化防止」をテーマに、平成18年度エネルギーに関する文理融合研究合同成果報告会を開催しました。

本報告会では、省エネによる地球温暖化防止のための「名大発」の取り組みとして、文系・理系の研究者、事務系・技術系職員及び民間企業関係者が一体となって学際的に進めてきた研究である「名古屋大学における省エネルギー推進と地球温暖化防止のための共同研究」の主要6プロジェクトについての成果を報告し、学内関係者を始め、多数の企業関係者、関東、関西、東海北陸地区の国立大学や近隣私立大学、愛知県、名古屋市等、合わせて約120名の参加者を得て、活発な意見交換が行われました。

まず開会にあたって、杉浦理事が大学としての省エネ推進の重要性を述べ、引き続き、エネルギーマネジメント研究・検討会主査の長谷川達也エコトピア科学研究所教授がこれまでの研究活動を紹介し、取り組んだ研究プロジェクトの成果を豊富なデータを基に発表しました。

その後、エネルギー問題研究会主査の北川邦行同研究所教授から活動内容の紹介、LED照明装置試作品の研究成果報告とデモンストレーションがありました。閉会にあたって、山口施設管理部長からあいさつがあり、今後の課題や本学のみならず近隣の大学や行政を巻き込んだ省エネ推進ネットワークづくりについての考えを述べ、報告会を締めくくりました。

また、報告会後に開催した情報交換会において、林達也全学技術センター技術長から今後の大学の省エネ活動に対する同センターの支援体制や姿勢が述べられ、参加者間で有意義な情報交換を行い、成功裏に閉会しました。



会場の様子



熱心に聞き入る参加者

平成18年度事務職員の海外研修報告会を開催

平成18年度事務職員の海外研修報告会が、3月13日(火)、野依記念学術交流館において開催されました。

本海外研修は、大学の国際化に対応するための人材を育成するため、平成4年から継続して実施されていますが、今年度からは公募制を導入し、研修に参加する職員自らで研修計画を立案することにより、本学のアジアを中心とした国際交流戦略等について認識させることで、事務職員の能力・意識を向上させることを目的として実施したもので、今年度は23名の事務職員を海外に派遣しました。

報告会は、研修成果を広く学内に還元するとともに、全

学的な関心を高めることを目的として開催したもので、当日は80名を超える職員が出席し、会場は満席となりました。

豊田事務局長から職員研修に寄せる期待が述べられた後、中国、ベトナム、タイ、シンガポール、韓国の海外拠点や学術交流協定校等における研修の概要及びその成果について研修参加者から報告があり、出席者からは高い関心が寄せられました。報告会終了後に開催した懇親会では、研修参加者を囲んで熱心な懇談が行われ、通常業務では関わる機会が少ない事務職員同士の交流という意味でも、大変有意義な機会となりました。



報告会の様子



あいさつする豊田事務局長

平成18年度名古屋大学総合技術研究会を開催

平成18年度名古屋大学総合技術研究会が、3月1日(木)、2日(金)、経済学部カンファレンスホール、IB電子情報館、工学部2号館において、全学技術センター主催のもと、開催されました。

本研究会は、日常業務で携わっている実験装置の開発、維持管理や改善・改良、実験・実習などについて発表することにより、今後の技術的な教育・研究支援の強化に活かすことを目的とするもので、大学共同利用機関及び各大学・国立高等専門学校等の技術職員約750名の参加がありました。

開会式に引き続き、平野総長による「ものづくりと材料

イノベーションに想う」と題した特別講演がありました。その後、機械・ガラス工作、装置開発、回路・計測・制御、極低温、情報・ネットワーク、生物科学、分析・環境、実験・実習の8技術分野における技術研究会により、167件の口頭発表及び133件のポスター発表が行われ、参加者数、発表件数ともこれまでで最大の技術研究会となりました。また、施設見学会には約320名の参加があり、博物館、年代測定総合研究センター、野依記念物質科学研究館、赤崎記念研究館等特色ある施設の紹介を行いました。

研究会には若く意欲ある多くの技術職員の参加があり、経験の深い技術職員との技術交流が繰り広げられ、教育・研究支援に係わる技術継承の展望が拓ける良い機会となりました。



特別講演を行う平野総長



ポスター発表の様子

「教育の質的改善をめざす全学シンポジウム」を開催

「教育の質的改善をめざす全学シンポジウム」が、3月8日(木)、IB電子情報館大講義室において開催されました。本シンポジウムは、平成18年度文部科学省大学教育の国際化推進プログラム「海外先進教育実践支援」に採択された取り組み、「FD活動の国際化による大学教育の質的向上」の一環として行われたもので、海外の協定校と提携



第3部パネル討論の様子

しつつ、本学の教育の質を高めるための方策を教員同士で討論することを目的としています。

シンポジウムの第1部では、イギリス ウォリック大学教職員研修センターのミカエラ・ボルグ博士が、「ウォリック大学における教育改善の取り組み」と題して講演を行いました。

第2部では、本学の協定校であるアメリカ ミシガン大学、オーストラリア シドニー大学、イギリス ウォリック大学のFD活動への参加報告が行われ、本学から参加した3名が各大学のFD活動の概要と特徴、教訓等を報告しました。

第3部では、本学における教育の質的改善やFD活動の進め方、その課題等についてパネル討論しました。パネリストとして参加した杉山理事からは、希望に満ちて入学してくる学生たちを満足させられる教育を実現することが重要であり、研究業績重視の圧力の中でも教育重視の文化の涵養が必要であるとの指摘がありました。

終始白熱した議論が繰り広げられ、成功裏に終了しました。

卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成18年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月5日(月)、野依記念学术交流館において開催されました。

この会は、今春卒業・修了して、進学、就職、帰国する等で本学を巣立っていく留学生(418名、36の国・地域)の今後の活躍を激励、祝福し、相互理解と交流を深め、本



記念品贈呈の様子

学での思い出の一つとなるよう開催されたもので、留学生や、愛知県をはじめとする日頃お世話になっている留学生支援団体、留学生関係教職員など約240名が参加して盛大に行われました。

最初に、平野総長から激励、祝福のあいさつがあった後、来賓を代表して、財団法人エヌジーケイ留学生基金の正田事務局長から祝辞がありました。また、名古屋大学留学生後援会からの記念品が、同後援会会長の平野総長より各部署の代表者へ手渡されました。これに対し、卒業・修了留学生を代表して大学院工学研究科博士課程後期課程3年のウォルフさん(ドイツ)と大学院生命農学研究科博士課程後期課程3年のシャハ シャムリさん(バングラデシュ)の2人が、日本に留学してからの感想を含め謝辞を述べました。

続いて、山本理事の発声により乾杯が行われ、終始なごやかに懇談が進められました。江崎留学生センター長による閉会のあいさつの後、留学生に留学生後援会及び留学生支援団体からの記念品等が手渡され、名残り惜しい中、閉会しました。

第11回経営協議会を開催



経営協議会の様子

第11回経営協議会が、2月24日(土)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、平成19年度予算の検討状況、財政計画、目的積立金の取扱い、平成18年度の経営状況について、それぞれの担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

また、外部委員からは、定員管理の在り方、女性研究者比率の向上、大学院における教育の在り方、産学連携に対する取り組み等について、貴重な意見が多数寄せられました。

続いて、名古屋大学基金の取り組み状況について、担当理事から報告が行われました。

第27回防災アカデミーを開催



会場の様子

第27回防災アカデミーが、2月20日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、災害対策室主催のもと、開催されました。

今回は、海津正倫環境学研究科教授による「スマトラ津波が人々を襲った衝撃～津波の挙動と土地条件～」と題する講演が行われ、2004年12月のスマトラ津波によって最大の被害を受けたインドネシア バンダアチェの街における詳細な現地調査の一端が紹介されました。津波後の被害の様子を紹介するだけでなく、津波がいかにして街をのみこみ、時間を追ってどのように広がっていったのかを映像を交えてわかりやすく説明しました。

会場を埋め尽くした88名の参加者からは、熱心な質問があり、講演終了後に個人的に質問をしている人も多数見受けられました。

学校教育法等の改正に伴い教員の職名が変更

人材育成と学術研究の両面で、大学が本来の使命と役割を一層果たすための適切な教員組織を構築するために行われた学校教育法等の一部改正に伴い、本学の教員組織に関する新たな方針が定められ、本年4月1日から運用されることとなりました。

本学の方針では、「教授」及び「講師」は従前どおり、教授の職務を助けると規定されていた従前の「助教授」は、教育研究を主たる職務とする「准教授」になりました。

教授及び助教授の職務を助けると規定されていた従前の「助手」は、職務内容に即し、教育研究を主たる職務とする「助教」と、教育研究の補助を主たる職務とする「助手」

に区分することとなりました。

また、新しい職名に対応した英文名称は、教授：professor、准教授：associate professor、講師：associate professor / lecturer、助教：assistant professor、助手：research associate となりました。

改正前	改正後
教授 (professor)	教授 (professor)
助教授 (associate professor)	准教授 (associate professor)
講師 (assistant professor/lecturer)	講師 (associate professor/lecturer)
助手 (research associate)	助教 (assistant professor)
	助手 (research associate)

瓦礫の山から歴史を読む

梶原 義実 大学院文学研究科講師

私の専門は「考古学」です。1年生向けの講義の最初の時間に、「考古学と聞いて思い浮かべることは？」と尋ねるのですが、いちばん多い答えは「発掘」、その他「ロマン」「お宝」「エジプト」「吉村作治教授（早稲田大学・エジプト学）」、果ては「インディー・ジョーンズ」「化石」などという答えもあります。

考古学を学問的に定義するとしたら「物質（モノ）資料をもちいて、人類の歴史を復原する学問」といえるかと思います。ですから、発掘＝考古学ではなく、発掘調査は考古学の研究資料を獲得する手段であり、その獲得した資料から、どのような歴史像を導き出すかが、学問の徒としての考古学者の力量と言えましょう。

考古学の中でも、私が専門とするのは日本考古学、その中でも「歴史考古学」とも呼ばれる分野で、文献史料が残っている時代の考古学です。考古学と言えば「縄文時代」とか「古墳」などがイメージされると思いますが、それより新しい時代でも、対象となる物質資料さえあれば、考古学として研究が成り立ちうるのです。とくに私は、古代の「瓦」をおもな研究対象としています。瓦といえば、「瓦礫」などの言葉もありますとおり、あまり役に立たないものの代名詞のように言われますが、これを調べることで、当時のさまざまな歴史を明らかにすることができるのです。

瓦の初現は、仏教とともに朝鮮半島から日本にもたらされたもので、当時の技術の粋を集めた建造物である寺院の屋根にのみ葺かれ、周囲の板葺などの低層建物の中で際だって重厚な瓦葺の堂塔は、寺院を建立した豪族の技術的・宗教的先進性を表していました。この瓦の軒先につけられた文様にはさまざまな系譜が存在し、当時の仏教の伝播の様相や、寺院造営に関する国家や地方豪族の関与のあり方などを探る重要な手掛かりになります。

また、瓦生産は当時の基幹産業のひとつであり、この瓦生産の組織が、当時の国家や地方政府、豪族や大寺院などにおいて、どのように管理運営されていたかを調べることで、律令期前後の手工業生産のあり方を、ひいては律令制というものの実態の一側面を知る一助となります。

このように、瓦という「モノ」から導き出される歴史が確かに存在しており、私たち考古学者は、それぞれ異なる「モノ」を材料に、歴史の復原に日々取り組んでいます。



名古屋大学野依記念学術交流館建設にともなう窯跡発掘調査



三河国分寺出土 軒瓦
 (豊川市教育委員会蔵。高浜市かわら美術館『三河の古瓦』より転載)

有機合成化学の壁に挑む： 逐次合成法から連続合成法へのパラダイムシフト

石原 一彰 大学院工学研究科教授

現代有機合成化学の力量をもってすれば、医薬品や高分子材料を工業的に大量生産できるだけでなく、分子量2600を超えるパリトキシン（スナギンチャクがもつ毒素）だって合成可能です。しかし、数 mg にしろ、実際に一つ一つの化学結合を順番に形成しながらパリトキシンを合成するのは大変なことであり（逐次合成法）、天然からの供給が微量のパリトキシンを数 kg 合成し供給できる可能性は限りなくゼロに近いです。複雑な構造の有機化合物を大量合成するには、まず(1)各工程の収率、選択性を限りなく100%に近づけることです。次に(2)工程数の短縮です。そのためには保護基の着脱を必要としない官能基選択的な反応開発が必要です。例えば各工程の反応収率が90%でも10行程の総収率は(90%)¹⁰=35%です。しかし、これだけでは複雑な物質を数 kg から数トン合成することは困難です。複雑な物質を大量生産するためにはどうしたらよいのでしょうか。一つ一つの反応が完成の域に近づいても、今なお解決しないこの問題こそ、我々若い世代の有機合成化学者に課せられた大命題です。一方、生体内に注目しますと、興味深いことに幾つかの反応が酵素により連続的に進行し（ドミノ反応=カスケード反応）、複雑な物質でも効率よく、しかも環境負荷なく生合成されています。例えば、動物細胞ではステロイドがオキシドスクアレンのドミノ型分子内閉環反応を鍵反応にラノステロールを経由して、華麗に生合成されることはよく知られています。生合成同様、化学合成でも、複数の反応を一つの容器内で行うワンポット合成は、中間行程の分離・精製行程を省略できるので大変魅力的です。(3)化学合成でもドミノ反応を利用できれば大幅に工程数を短縮出来るので大量合成も夢ではありません。

薬理作用を持つ有機化合物の多くは複数の不斉炭素をもった複雑な構造をしています。また、海洋生物から単離された有用生物活性物質にはハロ

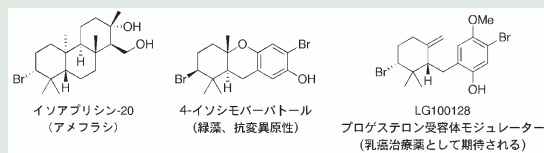


図1 含ハロゲン海洋天然物、医薬品リード化合物の例

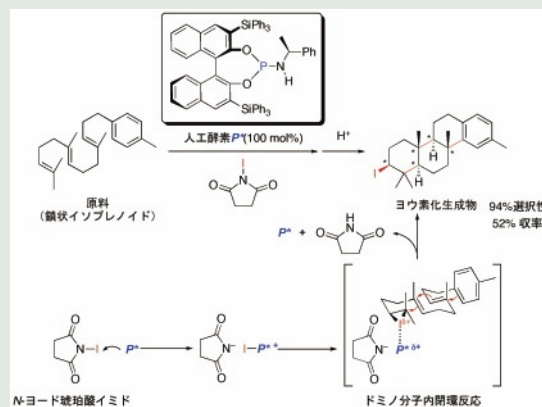


図2 エナンチオ選択的ヨード付加反応を引き金とするジアステレオ選択的ドミノ分子内閉環反応

ゲン原子を含むものが数多く見つかっています。特に海藻やそれを食餌するアメフラシなどの軟体動物は含ハロゲン化合物の宝庫であり、陸生生物には見られない多種多様な天然物が1000以上も単離されています(図1)。これら含ハロゲン海洋天然物の多くは抗真菌性、抗細菌性、抗ウイルス性、炎症活性などの興味深い生物活性を有しています。

このような複雑な構造の含ハロゲン生物活性物質の生合成においても、ステロイドの生合成同様、酵素による位置選択的かつエナンチオ選択的ハロニウムカチオン付加を引き金として、その複雑な多環状構造が一気にジアステレオ選択的に構築されていきます。今回我々は独自に開発した求核力の強いキラルホスホロアミダイト (P*) を人工酵素に選び、ヨウ素化剤である N-ヨード琥珀酸イミドと鎖状イソプレノイドとの生合成類似のドミノ閉環反応で所望の含ヨウ素多環状化合物を高選択的に合成することに成功しました。(図2)。本反応では、P* と N-ヨード琥珀酸イミドの反応で生成するキラルヨードニウムイオン (P*-I) が、鎖状イソプレノイドの末端二重結合へ位置及びエナンチオ選択的に反応、さらに続くジアステレオ選択的分子内閉環反応がドミノ的に起こることにより、所望の含ヨウ素多環状化合物が一気に生成しました。図2の反応例では生成物に5個の不斉炭素(図の星印を付けた炭素)が存在するため2⁵=32の異性体が生成する可能性があります。仮に100%の収率で反応が進行し、すべての異性体

が同じ確率で生成すると、生成物のなかに所望の異性体はわずか3%しか含まれていないことになります。我々は1つの炭素-ヨウ素結合と3つの炭素-炭素結合を一気に形成しながら5つの不斉炭素の立体化学を制御し、1つの異性体を94%の選択性で合成しました。

上記のドミノ分子内閉環反応を人とボールで表現することができます(図3)。人の腕は結合を表し、ボールはヨードニウムイオン(I⁺)、それを運ぶ人が人工酵素です。5人が腕を重ねて鎖状イソプレノイドになります。腕の重なりは二重結合を表します。ボールを持った人は左端の人を選んでボールを渡します。すると、重なっていた腕がドミノのように連続的に動き、三つの輪が出来ます。同じことがフラスコのなかでも分子レベルで起きました。

本研究成功の鍵は人工酵素の分子設計にあります。従来、このような反応を選択的に行うためには巨大な金属酵素(12万あるいは74万の分子量で、中心金属はFe(III)やV(V))を用いるしかありませんでした。我々は分子量がわずか951の有機小分子を人工酵素に用いることにより、酵素反応に匹敵する高い選択性で含ハロゲン多環状化合物を合成することに成功しました。我々の人工酵素を上記の生体酵素と比較すると、126分の1あるいは778分の1の大きさです。残念ながら今回開発した人工酵素は触媒的には作用しておらず、触媒化については今後の検討課題ですが、触媒的に進行しないまでも酵素のサイズを縮小できた合成上の意義は大きいです。なぜなら、実際に何molではなく何gの触媒を必要とするかが工業的に重要だからです(原子効率)。また、人工酵素



図3 ドミノ分子内閉環反応(図2)を模倣したドミノ体操

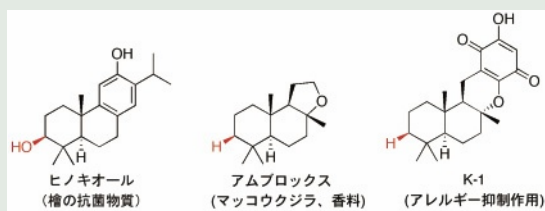


図4 ハロゲン原子を含まない多環状イソプレノイドの例

は両エナンチオマーを入手できるので、含ハロゲン多環状化合物も目的に応じてエナンチオマーの作り分けが可能です。また、ヨード基は他の官能基への化学変換が容易であり、合成上有用な官能基です。例えば、本合成法で得られる含ヨウ素多環状イソプレノイドのヨウ素原子は立体化学を保持したまま臭素原子、塩素原子に置換することができるだけでなく、水素原子、カルボキシル基への置換も可能です。また、ヨード基を脱離反応によってアルケンにも変換できるので、水酸基なども導入できます。従って、図1に示す含臭素イソプレノイドはもちろん、ヒノキオール、アムブロックス、K-1などの多環状イソプレノイド類も短行程で合成できると期待されます(図4)。

以上、我々は多環状イソプレノイド類の生合成類似型合成技術「エナンチオ選択的ヨード付加反応を引き金とするジアステレオ選択的ドミノ分子内閉環反応」に世界で初めて成功しました。従来の逐次合成法では大量生産が困難であった医薬品などの革新的な合成技術として期待されます。

なお、本研究成果は2007年2月22日に英国科学誌ネイチャーに掲載されました(Nature, 2007, 455, 900-903)。共同研究者である坂倉 彰講師と鶴飼厚志君(博士課程前期課程2年)の努力の賜物であり、心から深く感謝します。

江南市出身、1991年名古屋大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程修了、工学博士、米国ハーバード大学(E. J. Corey 研)で博士研究員を経て、1992年名古屋大学工学部助手、1997年同大難処理人工物研究センター助教授、2002年8月より現職。
専門分野: 有機合成化学、生物有機化学、グリーンケミストリー
趣味: 息子と将棋すること、娘と料理すること、樹木を育て観賞すること。

いしはら かずあき



平成18年度名古屋大学総長顕彰
2名1団体表彰



平成18年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月23日(金)午後4時30分より、シンポジオンホールにおいて行われ、2名の学生と1団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動



等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために、平成15年度に創設されたもので、顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果がともなう取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)と、「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に5件の学部推薦が、「正課外活動への取り組み」部門に自薦・他薦を合わせて9件の応募がありました。

これら合計14件の推薦・応募について、理事、部局長等で構成する総長顕彰委員会での審査を経て、「学修への取り組み」部門で2名、「正課外活動への取り組み」部門で1団体が受賞しました。

学修への取り組み

氏名	学部学科・学年	受賞理由
溝口 祐司	工学部 機械・航空工学科 3年	3年次でありながら大学院工学研究科博士課程の入学試験では4年生に引けを取らない学力を既に身につけている。研究活動への知的好奇心の大きさ、一般教養としてはTOEICでも高得点を挙げており、それらは学習への深い興味、自主的で受け身ではない積極的な学習態度の表れあり、機械工学研究へと向かう努力や意欲的な取り組みにおいて他の学生の模範となりうる。
水本 有紀	農学部 資源生物環境学科 4年	学部での突出して優秀な成績は、自発性に基づく日常的な努力・研鑽の賜物といえる。また、卒業研究では植物をスプリンクラーとして活用するというユニークな研究課題に取り組み、学会で発表した。これは「論理的思考力と創造力に富んだ勇気ある知識人」を体現するものとして高く評価できる。また、4年間の学生生活において無遅刻・無欠席を貫き、サークル活動も積極的に取り組み、何事にも真摯で誠実であり、努力・研鑽を惜しまない態度は、他の学生の模範となりうる。

正課外活動への取り組み

分野	団体名 (代表者)	受賞理由
社会貢献活動	震災ガーディアンズ (西村 健・工学部 社会環境工学科4年)	地震防災への危機意識を根付かせる為、学内外での多くのセミナーやイベントを行い、自作の「すごろく」や「震災シュミレーションゲーム」等を使って、子供達にもより分かりやすく、より身近な防災啓発活動を行っている。地域での交流活動にとどまらず、全国からの問い合わせも多く、また様々な世代や留学生向け等、今後社会的ニーズに合わせた活躍が期待される。

公開シンポジウム「拡張し変容する『日本語』」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月3日(土)、文学部237講義室において、公開シンポジウム「拡張し変容する『日本語』」を開催しました。本シンポジウムは同研究科における研究内容の公開を目的とし、同窓生及び広く一般の方へ参加を呼びかけ毎年行われているものです。今回は日本語学研究室が主幹となり、3つの講演と1時間の質疑応答が行われ



会場の様子

ました。

今回は、一般の方にも関心の高いテーマとして、日本語が時とともにいかなる拡張と変容を遂げてきたか、その拡張と変容によって日本語は何を失い何を得たのか、また、変わらない本質をいかに維持しているのか、といった問題についての実相が、音声・形態・構文などの側面から取り上げられました。宮地朝子同研究科講師、釘貫亨同研究科教授から、それぞれ文法構造にかかわる歴史的な考察が提示され、同研究科英語学研究室の同窓生でもある窪菌晴夫神戸大学大学院文学研究科教授から、戦後の日本語の多様性と変化及びその言語学的考察が、豊富な実例と共に示されました。同窓生はもちろん、全国からの専門の研究者や一般の方々を含め83名の参加者があり、盛会のうちに終了しました。

講演と活発な質疑応答により、日本語を歴史と現状の両面の課題としてとらえ、また、言語とそれに関わる諸要素、歴史・社会などとの接点を見出す試みの一つが実現したといえ、変化し続ける日本語についての関心がより高まる機会となりました。

平成18年度教育学部附属学校卒業式を挙行

平成18年度名古屋大学教育学部附属学校卒業式が、3月1日(木)、豊田講堂の改修工事のため附属中・高等学校第1体育館において、杉山理事、豊田理事、寺田教育学部長、筏井幸夫PTA会長、高味修一同窓会会長を来賓に迎えて行われました。

式典では、開会にあたり、卒業生の答辞委員会が作成し



祝辞を述べる杉山理事

た映像が流れ、附属高等学校の全在校生徒240名及び附属中学校の代表生徒20名、附属中・高等学校教職員及び保護者150名が見守る中を、卒業生115名が晴れやかな表情で入場しました。卒業生の一言メッセージやプロフィール等が体育館の正面両壁面に映し出される中、豊田附属学校長は卒業生一人一人に卒業証書を手渡し、「学ぶ→考える→学ぶのサイクルが大事。また、がんばらないこととあきらめないことが夢を持ち続けることになる」と式辞を述べました。

次に、杉山理事から、自らの経験を例に挙げながら、「隣りの人との違いは少しなのだから、かけがえのない自分を大切に」と、寺田学部長から、「キャリアアンカー(拠り所)を持つことが大切」と祝辞がありました。PTA会長の祝辞、在校生の送辞に続いて、最後に卒業生答辞委員会制作によるお世話になった担任の先生方への想いと感謝の気持ちのこもった映像が流され、上映終了後には涙ぐむ人も見受けられ、卒業生する生徒一人一人が主体的に作り上げた温かみのある卒業式となりました。

シンポジウム「経済学、経営学の基礎力、応用力とは何か」を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、3月8日(木)、文系総合館カンファレンスホールにおいて、シンポジウム「経済学、経営学の基礎力、応用力とは何か 『新カリキュラム』および『5年一貫教育プログラム』への期待」を開催しました。

シンポジウムでは、荒山同研究科長から平成19年度より実施される新カリキュラム及び学部・修士5年一貫教育



シンポジウムの様子

プログラムの概要について説明があった後、山本達司同研究科教授の司会の下、小山高史日本銀行名古屋支店長、佐藤樹一郎中部経済産業局長、栗岡完爾トヨタ自動車株式会社相談役・豊田通商株式会社監査役、滝 紀子学校法人河合塾教育研究開発本部教育研究部長、若尾本学教養教育院長、金井雄一経済学研究科教授をパネリストに迎え、活発な議論を行いました。

また、同日、シンポジウムに先立ち、同研究科第1会議室において、経済学研究科懇談会が開催され、パネリストも務めた懇談会委員が、同研究科の教育研究活動についての意見を述べました。

情報科学研究科が基盤研究公開セミナーを開催

大学院情報科学研究科は、3月5日(月)、IB電子情報館において、基盤研究公開セミナーを開催しました。

このセミナーは、設立後4年を経た同研究科の教育研究活動を広く一般の方々に紹介することを目的として、昨年度に引き続き開催されたものです。今回のセミナーでは「人間と機械をつなぐ」を全体テーマとして、2名の同研究科



講演する武田教授

教員による講演が行われ、およそ50名の参加がありました。

初めに、高浜盛雄同研究科情報システム学専攻教授による「制御システムの限界は、何で決まるか?」と題する講演が行われ、制御システムの歴史や制御理論の変遷を含めて、最近のH ∞ 制御理論を含むロバスト制御理論の解説がなされるとともに、飛行制御システムを例に最近の研究成果が紹介されました。続いて行われた、武田一哉同研究科メディア科学専攻教授による「自動車との対話」では、近年、期待が高まっている人間と機械とのインターフェースとしての音声言語の利用について講演が行われ、自動車内での対話音声データベースの収集・利用や音声信号処理における雑音の抑圧技術が、動画や実演により紹介されました。

どちらの講演でも、終了後、一般の方からも質問がなされるなど、充実したセミナーとなりました。

公開セミナー「新しい癌治療法の開発を目指して」を開催

● 遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、3月9日(金)、野依記念学术交流館において、第6回公開セミナー「新しい癌治療法の開発を目指して」を開催しました。

セミナーでは、まず、目加田英輔大阪大学微生物学研究所教授による「細胞増殖因子 HB-EGF を標的とした抗癌剤の開発」と題した講演がありました。基礎的研究(細胞



セミナーの様子

増殖のメカニズム)を長年貫くことで、その成果が、実際の癌治療に役立つ新しい抗癌剤 CRM197 の発見、有効利用へと繋がっていく様子がよく伝わる講演内容でした。続いて、小林 猛中部大学応用生物学研究科教授による「癌温熱免疫療法の新展開」と題した講演がありました。抗体付きマグネトリポソームを使用し、交番磁場を付加することで患部を特異的に高温にして癌細胞を死滅させるという非常にユニークな手法が紹介され、ヒートショックタンパク質誘導や免疫系の活性化等の本来の生体機能を活性化することで、癌が消滅する画期的な方法であることが感じ取れました。

“癌治療”という、多くの人にとって気になる話題だけに学内外合わせて80名の参加者があり、非常に有意義なセミナーでした。

21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解説」第1回名古屋国際冬の学校を開催

21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解説」は、2月19日(月)から23日(金)の5日間、三重県志摩市のメルパール伊勢志摩ホテルにおいて、第1回名古屋国際冬の学校を開催しました。

同学校は、大学院学生や若手研究者を対象としており、国内外の第一線の研究者22名(内、海外から12名)を講師として迎え、1時間半の講義35コマを開講しました。講義には、大学院理学研究科素粒子宇宙物理学専攻及び物質理学専攻(物理系)の大学院学生66名と、国内の他大学から2名、海外から5名の参加がありました。



講義の様子

講義の他にも、講師と学生の交流を図る目的で、学生のポスター発表の時間を設け、27名の学生が、講師を含む参加者の前で2分間のまとめを英語で発表し、各自のポスターの前で説明を行いました。最初は遠慮がちだった学生たちも、同学校が終わる頃には、講義で積極的に質問したり、自分のポスターを講師に向かって宣伝する姿も見られるようになりました。

同学校の閉校に当たって、授業で積極的に質疑応答をした5名の学生にベストスチューデント賞を、また、講師や COE メンバーの投票により2名の学生にベストポスター賞を授与し、真珠のストラップを贈呈しました。

閉校後、超一流の講師陣と直接触れ合えた感激の声や、英語の重要性を改めて認識したなどの感想が寄せられ、学生にとっては非常に刺激になった5日間でした。



全体集合写真

「大学教育改革フォーラム in 東海2007」を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月10日(土)、IB電子情報館において、「大学教育改革フォーラム in 東海2007」を開催しました。これは、東海地域の大学の教職員が、それぞれの大学で教育を改善するために何をすべきかについて、率直に語り合おうという集まりで、本学や東海地域の大学の教職員のほか、福島、東京、京都、岡山など全国各地から計140名が参加しました。

本フォーラムでは、戸田山高等教育研究センター長の開会宣言、杉山理事のあいさつに続いて、黒木登志夫岐阜大学学長により、「学長の本音が語るミドルマネジメントへの

期待」と題する基調講演が行われました。講演では、最近の高等教育政策の概要と特徴を明らかにし、その中で国立大学法人の置かれた厳しい状況や、そこで働く教職員に求められる課題について報告しました。

続いて、午前と午後の2回、分科会に分かれて、「高大連携・初年次教育」、「大学職員の専門性と研修」、「今求められるキャリア支援とは」、「FDが形成すべき能力とは」という現在各大学が直面している重要問題をテーマに、報告と討論が行われたほか、パネルディスカッションやポスター発表が行われました。

本フォーラムを通じて、大学を取り巻く厳しい環境の中でも、多くの心ある人たちが自分の大学をよくしたいと願って日々努力していることを確認することができました。来年度以降も同様のフォーラムを開催することを確認して、盛会のうちに幕を閉じました。



あいさつする杉山理事



会場の様子

「防災フェスタ2007 in 名古屋大学」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、3月4日(日)、IB電子情報館において、「防災フェスタ2007 in 名古屋大学」を開催しました。これは、愛知県、名古屋市、大学院環境学研究科等のグループが文部科学省の委託で実施した、近い将来の巨大地震に対し、住宅耐震化や地域連携を住民一人一人に促す方策やシステムを開拓した「防災研究成果普及事業」の最終成果報告会として実施されたものです。

本フェスタは、成果報告会にとどまらず、行政、大学、建設・ライフライン技術者、マスメディア、教育者、そ

して市民、ボランティア、NPOが日頃から緊密に連携し、楽しい行事を通じて一般に防災の大切さを発信する取り組みとして全国で注目されており、多くの取材陣も訪れ、参加者は、幼児からお年寄りまで総勢600名を超えました。

基調講演やパネルディスカッションと同時に、地域防災力向上シミュレータ体験、防災ファッションショー、紙芝居、耐震診断、家具固定、救命救急、防災まち歩き、防災運動会、津波実験、震災シミュレーションゲーム、ストローハウス、防災カフェなど、30を超える様々な体験、展示コーナーが設けられ、参加者は、各種コーナーで気軽に楽しみながらも防災に対する意識が高められた様子でした。昼食時には、炊き出しとして、生協の協力によるトン汁とご飯が提供されました。

フェスタ終了後には、来年度以降の開催を期待する声が多く届けられ、もう少し市民に近い場所に会場を移しての開催が検討されています。



様々な企画ブースが並んだプレゼンテーションスペース



防災ファッションショーの様子

シンポジウム「バイオウエイストのリファイナリー型資源化」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、2月26日(月)、27日(火)の2日間に渡り、「バイオウエイストのリファイナリー型資源化」をテーマに、エコトピア科学シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムは、科学技術振興調整費アジア科学技術協力の戦略的推進プログラムで採択され、バイオウエイストから資源やエネルギーを抽出するための技術及び社会基



自由討論での集合写真

盤の確立と、そのためのアジア研究ネットワークの構築を目指している「バイオウエイストのリファイナリー型資源化」プロジェクトの研究成果報告会を兼ねて行われました。

報告会には、同プロジェクトの各参加研究機関（中国科学院、慶南大学、インドネシア技術評価応用局）の関係者を始め、学内関係者や企業関係者、合わせて約50名の参加があり、活発な意見交換が行われました。

初日のシンポジウムでは、開会にあたって松井エコトピア科学研究所長が、アジア諸国を中心とした研究協力体制作りの重要性を述べ、渡辺その子文部科学省科学技術学術政策局国際交流推進官が、同プロジェクトを始めとするアジア科学技術協力の戦略的推進プログラムについての概要を説明しました。引き続き、長谷川達也エコトピア科学研究所教授がこれまでの研究活動を紹介した後に、各国研究者によって、研究進捗状況に関する口頭発表及びポスター発表が行われました。二日目には、研究室見学の他、バイオウエイストのリファイナリー型資源化プロジェクトを巡って自由討論が行われ、各参加研究機関の間での共同研究の推進や参加国以外のアジア諸国との研究協力体制の構築などが議論され、成功裏に閉会を迎えました。

IODP 大学&科学館キャンペーン講演会を開催

●博物館

博物館は、3月2日(金)、3日(土)、同館講義室において、主催である独立行政法人海洋研究開発機構及び地球科学技術統合推進機構の共催として、IODP（統合国際深海掘削計画）大学&科学館キャンペーン講演会を開催しました。

IODPは、日本がリードする21世紀の一大国際研究プロジェクトで、地球深部のマントルまでの掘削、巨大地震の震源域の研究、新たな深海生物や資源の探査が主要な目標になっています。こうした研究を推進する“動く研究センター”である長さ210m、5万7000トンの地球深部探査船「ちきゅう」の1/100の模型やIODPの解説ビデオやパネル、「ち

きゅう」が青森沖で試験掘削したボーリングコアなどが、3月1日から15日まで、博物館で展示されました。

2日の大学生向け講演会では、山本理事による開会のあいさつの後、IODPの概要や目標、地球深部探査船「ちきゅう」によってできる研究内容が紹介され、大学院学生を中心に活発な質疑応答が行われ、最後に、宿利文部科学省海洋地球課企画官のあいさつをもって閉会になりました。

翌3日の子ども・一般向け講演会では、IODPや「ちきゅう」の解説だけでなく子ども向けのクイズもあり、参加者全員が楽しんでいました。同講演会後には、西本名古屋市科学館学芸員の指導により、マントルの代表的鉱物であるカンラン石などの砂を使った砂絵づくりが行われ、参加者は思い思いのデザインで砂絵づくりに挑戦していました。



IODP「ちきゅう号」展示の様子



砂絵づくりの実習風景

身近なところから環境問題を考え行動する

今、私たちには、暮らしに必要な資源の消費を最小限に抑えて、物質を無駄なく循環させて利用し、環境への負荷を軽減させながら生きていくことが求められています。こうした循環型社会を実現していくために、私たち一人ひとりにできることは何かを考え、身近な取り組みから実行していくことが大切です。そこで、12年にわたり環境活動に取り込んでいるサークルを紹介します。

名古屋大学環境サークル“Song Of Earth”は、本学付近で行われている名古屋市長のごみの分別パトロールや日本学生支援機構東海支部主催の植樹祭にボランティアスタッフとして参加したり、南リサイクルプラザ（家具のリユース施設）の見学会やリユース市実行委員会を主催したり、名古屋大学下宿用品リユース市を開催するなどの活動を行っています。

本学の学生有志によるリユース市は、インターネットで検索するとトップに出てくるほど有名です。「名古屋大学環境報告書2006」でも「学生および学内諸団体による取り組み」として紹介しています。リユース市は循環型社会を目指す取り組みの一環をなしています。それは、ごみをなるべく出さない（リデュース）、繰り返し使用する（リユース）、最後に資源として再使用する（リサイクル）、いわゆる“3つのR”の取り組みへの具体的な工夫の一つです。リユース市実行委員会の代表は、日本古来の「もったいない」という意識を学生に認識して欲しいと考えています。

名古屋大学下宿用品リユース市は、卒業生が不要になった家電製品や家具などの物品を回収し、下宿を始める新入生に提供しています。したがって、大学としては間接的ですが、地域のごみの減量化に協力することになります。そのため、本学もリユース市会場として体育館の使用を認めたり、共同教育研究地区の倉庫を物品保管場所として貸し出すことでその活動を支援しています。また、平成15年度の第1回総長顕彰「正課外活動への取り組み」部門で表彰



リユース市用の物品回収

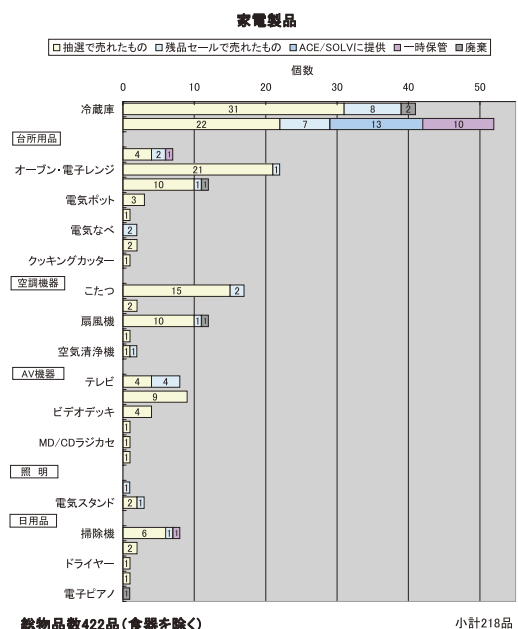


体育館でのリユース市

しています。工学部は教員ボランティアが協力し、リユース市の開催場所近くの2部屋を2月初旬から4月初旬の間、物品の一時保管場所として貸し出しています。

同サークルは、所属する学生の学部も農学部、工学部、経済学部と異なり、それぞれの持つ価値観や考え方も多様です。メンバーは三重大学や愛知淑徳大学などの環境サークルとの協力や地域住民の方との交流から、多くのことを学んでいます。今後も東山動植物園など身近な環境リソースの活用、一人暮らしのための情報冊子の作成、なごや環境大学への参加などを通して、「何か活動してみたい」、そんな思いを形にしていくそうです。

環境問題を意識している学生、環境保全に貢献したいと思っている学生は多数いると思います。そういう学生たちに、少しの時間と手間を惜しまなければ誰でも循環型社会の実践は出来るというヒントになればと思います。



2.13 中国極地研究所所長等

中国極地研究所所長及び同研究所副所長等が「極地科学のためのアジアフォーラム」に参加されることを機に、表敬訪問されました。



3.15 上海交通大学法学院院長等

上海交通大学法学院院長及び同法学院助教授が日本法教育研究センターの設立及び今後の両大学の学術交流について、意見交換を行うことを機に、表敬訪問されました。



新任役員・部局長等の紹介

●理事（総務・事務総括関係担当）・事務局長



高橋 誠
(たかはし まこと)

〈略歴〉

昭和54年4月 文部省社会教育局青少年教育課
 昭和55年4月 文部省体育局学校保健課
 昭和57年9月 文部省初等中等教育局職業教育課
 昭和58年4月 文部省初等中等教育局職業教育課企画調査係長
 昭和59年12月 文部省教育助成局財務課法規係長
 昭和61年8月 鳥根県教育委員会事務局学事課長
 昭和63年8月 文部省教育助成局海外子女教育課海外子女教育専門官
 平成3年7月 文化庁文化財保護部伝統文化課課長補佐
 平成5年3月 文部省大臣官房会計課副長
 平成6年4月 文部省教育助成局財務課教育財務企画室長
 平成7年10月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授
 平成11年4月 文部省大臣官房調査統計企画課長
 平成13年1月 放送大学学園総務部長
 平成14年8月 文化庁文化財部伝統文化課長
 平成16年2月 政策研究大学院大学事務局長
 平成16年4月 政策研究大学院大学運営局長
 平成19年4月 名古屋大学理事（総務・事務総括関係担当）・事務局長

●副総長（評価・総合企画関係担当）



松下 裕秀
(まつした ゆうしゅう)

専門分野：高分子材料化学、高分子形態学、高分子界面
 〈略歴〉

昭和57年4月 名古屋大学助手（工学部）
 昭和62年8月 名古屋大学講師（工学部）
 平成6年1月 名古屋大学助教授（工学部）
 平成6年7月 東京大学助教授（物性研究所）
 平成11年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
 平成16年4月 名古屋大学総長補佐（目標・評価担当）
 平成16年5月 名古屋大学評価企画室長
 平成19年4月 名古屋大学副総長（評価・総合企画関係担当）
 名古屋大学総合企画室長

新任役員・部局長等の紹介

●高等研究院長

近藤 孝男
(こんどう たかお)



専門分野：時間生物学、植物生理学、細胞生物学
(略歴)

昭和53年10月 生物科学総合研究機構助手（基礎生物学研究所）
昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構助手（基礎生物学研究所）
平成7年4月 名古屋大学教授（理学部）
平成8年4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）
平成15年1月 名古屋大学評議員
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員（～平成20年3月31日）
平成16年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長
平成18年1月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長
（～平成20年3月31日）
平成19年4月 名古屋大学高等研究院長（～平成22年3月31日）

●教育学部附属中学校長、教育学部附属高等学校長

植田 健男
(うえだ たけお)



専門分野：教育経営学
(略歴)

昭和59年4月 京都大学助手（教育学部）
昭和62年4月 大阪経済大学専任講師
平成2年4月 名古屋大学助教授（教育学部）
平成12年4月 名古屋大学助教授（大学院教育発達科学研究科）
平成12年11月 名古屋大学教授（大学院教育発達科学研究科）
平成18年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長
平成19年4月 名古屋大学教育学部附属中学校長、
教育学部附属高等学校長（～平成21年3月31日）

●医学部附属病院長

松尾 清一
(まつお せいいち)



専門分野：内科学一般、腎臓内科学
(略歴)

昭和61年5月 名古屋大学助手（医学部）
昭和61年7月 名古屋大学助手（医学部附属病院）
平成9年2月 名古屋大学講師（医学部附属病院）
平成14年1月 名古屋大学教授（大学院医学研究科）
名古屋大学医学部附属病院第三内科長
平成14年4月 名古屋大学教授（大学院医学系研究科）
平成14年6月 名古屋大学医学部附属病院腎臓内科長
名古屋大学医学部附属病院卒後臨床研修センター部長
平成16年4月 名古屋大学医学部附属病院副病院長
名古屋大学大幸医療センター長
平成19年4月 名古屋大学医学部附属病院長（～平成22年3月31日）

●大学院工学研究科長・工学部長

小野木 克明
(おのぎ かつあき)



専門分野：反応工学・プロセスシステム、システム工学、
生産工学・加工学

(略歴)
昭和53年4月 名古屋大学助手（工学部）
昭和55年10月 豊橋技術科学大学助手（工学部）
昭和57年4月 豊橋技術科学大学講師（工学部）
昭和63年1月 豊橋技術科学大学助教授（工学部）
平成6年10月 豊橋技術科学大学教授（工学部）
平成8年4月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
平成17年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員（～平成21年3月31日）
平成19年4月 名古屋大学大学院工学研究科長・工学部長
（～平成21年3月31日）

●大学院国際言語文化研究科長

吉村 正和
(よしむら まさかず)



専門分野：翻訳理論、ヨーロッパ文化史
(略歴)

昭和49年4月 岡山大学助手（教養部）
昭和50年4月 岡山大学講師（教養部）
昭和52年4月 名古屋大学講師（教養部）
昭和54年4月 名古屋大学講師（総合言語センター）
昭和56年2月 名古屋大学助教授（総合言語センター）
平成3年4月 名古屋大学助教授（言語文化部）
平成4年5月 名古屋大学教授（言語文化部）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院国際言語文化研究科）
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員（～平成21年3月31日）
名古屋大学大学院国際言語文化研究科副研究科長
平成19年4月 名古屋大学大学院国際言語文化研究科長
（～平成21年3月31日）

●大学院情報科学研究科長

古賀 伸明
(こが のぶあき)



専門分野：計算量子化学
(略歴)

昭和61年7月 岡崎国立共同研究機構助手（分子科学研究所）
平成5年4月 名古屋大学助教授（教養部）
平成5年10月 名古屋大学助教授（情報文化学部）
平成10年10月 名古屋大学教授（大学院人間情報学研究科）
平成15年4月 名古屋大学教授（大学院情報科学研究科）
平成19年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科長（～平成21年3月31日）

新任役員・部局長等の紹介

●アイソトープ総合センター長

饗場 弘二
(あいば ひろじ)

専門分野：分子生物学
(略歴)

昭和49年6月 京都大学助手 (医学部)
昭和59年12月 筑波大学助教授 (化学系)
平成3年4月 名古屋大学教授 (理学部)
平成8年4月 名古屋大学教授 (大学院理学研究科)
平成19年4月 名古屋大学アイソトープ総合センター長
(～平成21年3月31日)



●留学生センター長

石田 幸男
(いしだ ゆきお)

専門分野：機械力学・制御
(略歴)

昭和50年4月 名古屋大学助手 (教養部)
昭和51年4月 名古屋大学講師 (教養部)
昭和53年4月 名古屋大学講師 (工学部)
昭和57年1月 名古屋大学助教授 (工学部)
平成6年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成18年4月 名古屋大学総長補佐 (財務担当)
平成19年4月 名古屋大学留学生センター長 (～平成21年3月31日)
名古屋大学教育研究評議会評議員 (～平成21年3月31日)



●農学国際教育協力研究センター長

山内 章
(やまうち あきら)

専門分野：循環資源学、作物学
(略歴)

昭和63年9月 テキサス工科大学研究員 (農学部)
平成元年9月 テキサス農工大学研究員 (ブラックランド研究所)
平成2年5月 名古屋大学助手 (農学部)
平成4年4月 名古屋大学助教授 (農学部)
平成11年4月 名古屋大学教授 (大学院生命農学研究科)
平成16年7月 名古屋大学大学院生命農学研究科副研究科長
(～平成20年3月31日)
平成19年4月 名古屋大学農学国際教育協力研究センター長
(～平成21年3月31日)



●発達心理精神科学教育研究センター長

森田 美弥子
(もりた みやこ)

専門分野：家族心理学
(略歴)

昭和63年4月 名古屋大学助手 (教育学部)
平成6年10月 名古屋大学助教授 (医療技術短期大学部)
平成9年10月 名古屋大学助教授 (教育学部)
平成12年4月 名古屋大学教授 (大学院教育発達科学研究科)
平成19年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター長
(～平成21年3月31日)



●小型シンクロトン光研究センター長

竹田 美和
(たけだ よしかず)

専門分野：半導体材料学、半導体界面物性、放射光工学、
半導体結晶成長

(略歴)

昭和52年4月 京都大学助手 (工学部)
昭和61年11月 京都大学講師 (工学部)
平成2年11月 京都大学助教授 (工学部)
平成3年4月 名古屋大学教授 (工学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成14年4月 名古屋大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長
平成16年4月 名古屋大学総長補佐 (産学官連携担当)
平成19年4月 名古屋大学小型シンクロトン光研究センター長
(～平成21年3月31日)



●総務部長

岩川 雅士
(いわかわ まさし)

(略歴)

昭和48年7月 大阪大学大型計算機センター
昭和56年8月 文部省大臣官房人事課福祉班
昭和62年11月 文部省大臣官房人事課総務班専門職員
昭和63年4月 文部省大臣官房人事課総務班栄典係長
平成2年10月 文部省大臣官房人事課給与班給与第一係長
平成5年4月 静岡大学経理部経理課長
平成7年4月 東京医科歯科大学庶務部人事課長
平成10年4月 文部省大臣官房福利課課長補佐 (兼) 共済調査官
平成13年1月 文部科学省大臣官房人事課福利厚生室室長補佐
平成14年4月 琉球大学総務部長
平成15年10月 神戸大学総務部長
平成18年4月 神戸大学総務部長 (兼) 秘書課長
平成19年4月 名古屋大学総務部長



新任役員・部局長等の紹介

●学務部長

茶島 豊
(ちゃばたけ ゆたか)



〈略歴〉
昭和56年4月 北海道教育大学札幌分校庶務係
昭和58年6月 文部省大臣官房調査統計課
昭和63年4月 文部省大臣官房調査統計課国内第一調査係主任
昭和63年7月 文部省大臣官房調査統計企画課管理係主任
昭和63年10月 文部省大臣官房調査統計企画課管理係長
平成元年4月 文部省大臣官房調査統計企画課専門調査係長
平成2年4月 文部省大臣官房調査統計企画課学校基本調査係長
平成4年4月 文部省大臣官房政策課総務係長
平成7年4月 秋田大学庶務部庶務課長
平成9年4月 奈良女子大学会計課長
平成10年4月 文部省大臣官房調査統計企画課分析調査官
平成12年6月 文部省大臣官房調査統計企画課課長補佐
平成13年1月 文部科学省生涯学習政策局調査企画課課長補佐
平成14年4月 文部科学省生涯学習政策局社会教育課課長補佐
平成16年4月 金沢大学総務部長(併)研究国際部長
平成17年4月 奈良先端科学技術大学院大学総務部長
平成18年4月 奈良先端科学技術大学院大学教育・研究支援部長
平成19年4月 名古屋大学学務部長

●文系事務部長

青山 生修
(あおやま いくのぶ)



〈略歴〉
昭和43年5月 名古屋大学厚生課
昭和62年5月 名古屋大学経理部主計課総務掛主任
平成元年5月 名古屋大学空電研究所会計掛長
平成9年4月 北陸先端科学技術大学院大学研究協力部研究協力課課長補佐
平成12年4月 名古屋大学工学部・工学研究科経理課専門員
平成14年4月 名古屋大学経理部主計課課長補佐
平成16年4月 名古屋大学財務部財務課財務調整主幹
平成17年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科管理課長
平成18年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長
平成19年4月 名古屋大学文系事務部長

●医学部・医学系研究科事務部長

野間 省二
(のま しょうじ)



〈略歴〉
昭和42年6月 徳島大学庶務部庶務課
昭和43年2月 徳島大学医学部附属病院業務課
昭和48年10月 徳島大学医学部
昭和52年4月 徳島大学庶務部人事課
平成55年4月 高知医科大学附属病院創設準備室給食係長心得
平成56年4月 高知医科大学業務部医事課給食係長
平成59年4月 高知医科大学業務部医事課医事係長
平成63年4月 徳島大学医学部附属病院医事課医事係長
平成3年4月 徳島大学総合科学部会計係長
平成6年3月 徳島大学総合科学部事務長補佐
平成6年4月 北九州工業高等専門学校庶務課長
平成9年7月 山口大学医学部医事課長
平成12年4月 岡山大学医学部総務課長
平成14年4月 九州大学医学部附属病院総務課長
平成17年4月 高知大学病院事務部長
平成17年7月 高知大学医学部・病院事務部長
平成19年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部長

●医学部・医学系研究科事務部次長

青山 正晴
(あおやま まさはる)



〈略歴〉
昭和49年8月 名古屋大学経理部経理課
平成元年6月 名古屋大学経理部主計課第二予算掛主任
平成4年4月 核融合科学研究所管理部会計課司計係長
平成6年4月 名古屋大学理学部経理掛長
平成13年4月 名古屋大学経理部主計課専門員
平成15年1月 名古屋大学経理部主計課課長補佐
平成16年4月 名古屋大学財務部財務課課長補佐
平成17年4月 名古屋大学財務部財務課財務調整主幹
平成18年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所事務長
平成18年10月 名古屋大学法学部・法学研究科事務長
平成19年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長

●附属図書館事務部長

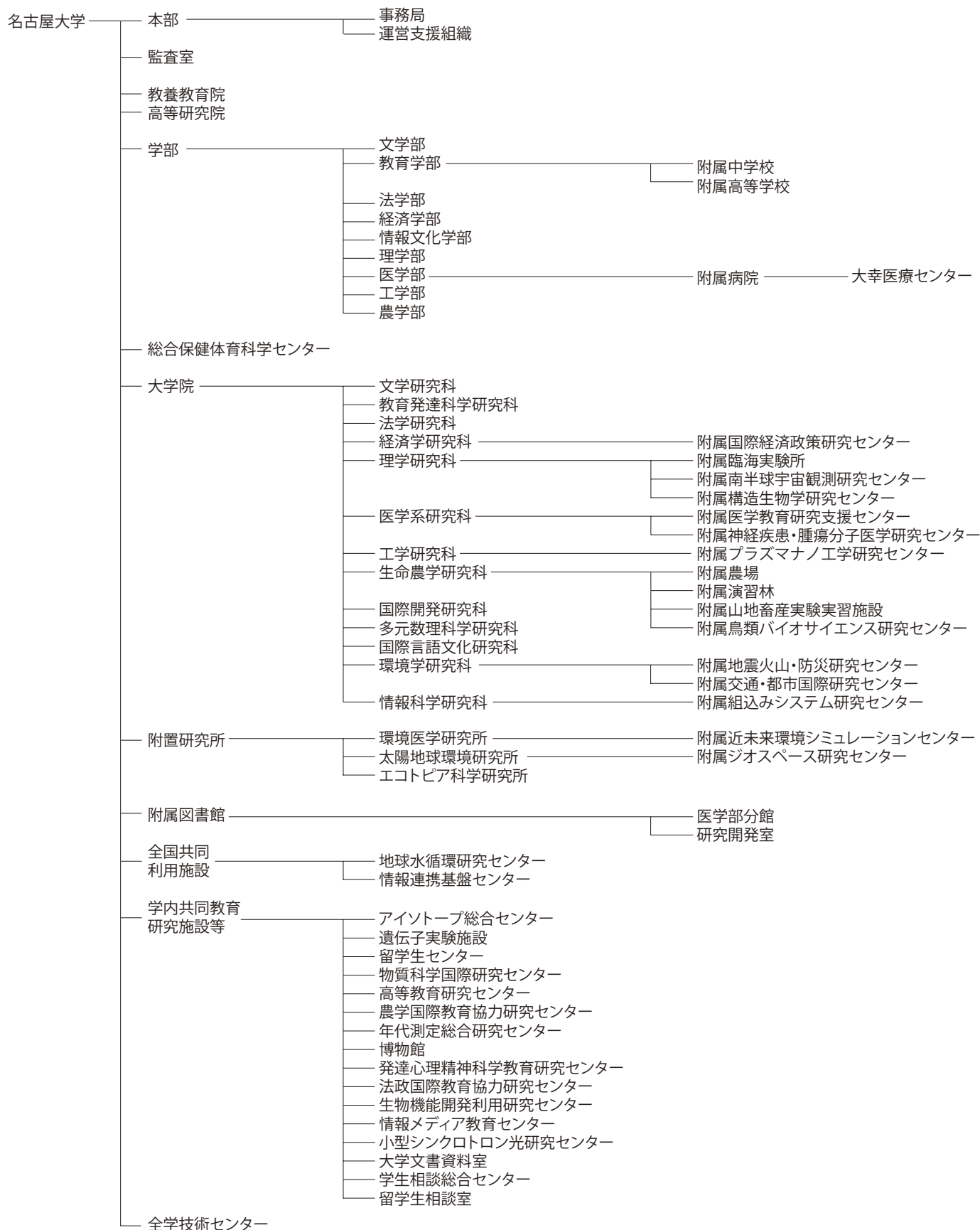
川瀬 正幸
(かわせ まさゆき)



〈略歴〉
昭和49年11月 名古屋大学附属図書館整理課
昭和58年4月 名古屋大学附属図書館学術情報課掛長心得
昭和59年1月 名古屋大学附属図書館学術情報課学術情報掛長
昭和63年4月 名古屋大学附属図書館学術情報課第二情報資料掛長
昭和63年4月 名古屋大学附属図書館情報システム課第二情報資料掛長
平成3年4月 名古屋大学附属図書館情報管理課受入掛長
平成4年4月 名古屋大学附属図書館情報管理課課長補佐
平成7年4月 図書館情報大学図書館情報課長
平成10年4月 九州大学附属図書館情報システム課長
平成13年4月 国立情報学研究所開発・事業部アプリケーション課長
平成16年4月 東京大学附属図書館情報管理課長
平成17年4月 東京大学附属図書館総務課長
平成19年4月 名古屋大学附属図書館事務部長

平成19年度名古屋大学組織図

平成19年4月1日現在



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H18. 6. 1	「情報通信月間」東海総合通信局長表彰	大学院情報科学研究科教授	渡邊 豊英	
H18.11.16	Japan-U.S. Communication Association The Top Faculty Paper Award	大学院教育発達科学研究科 助手	元吉 忠寛	五十嵐祐（日本学術振興会特別研究員・大阪大学大学院人間科学研究科）、高井次郎（大学院教育発達科学研究科助教授）、吉田俊和（大学院教育発達科学研究科教授）と連名
H18.11.27	日本農学進歩賞	生物機能開発利用研究セン ター助教授	芦苜 基行	
H19. 1.6	Pople Medal (The Pople Medal of the Asian Pacific Association of Theoretical and Computational Chemists (APATCC))	大学院情報科学研究科 助教授	天能精一郎	
H19. 1.22	2006年度中部分析化学奨励賞	大学院工学研究科助手	加地 範匡	
H19. 1.24	電子情報通信学会情報セキュリティ研究専門委 員会 SCIS 論文賞	大学院工学研究科助教授	岩田 哲	
H19. 1.26	AROB Contribution Award	大学院情報科学研究科教授	有田 隆也	
H19. 1.27	日本疫学会奨励賞	大学院医学系研究科助教授	八谷 寛	
H19. 1.29	朝日賞	大学院理学研究科教授	近藤 孝男	
H19. 1.29	(財)ホソカワ粉体工学振興財団 ホソカワ研究奨励賞	エコトピア科学研究所 助教授	内山 知実	
H19. 1.31	電気化学会東海支部 若手研究者特別賞	大学院環境学研究科助手	長尾 征洋	
H19. 2. 5	第23回井上学術賞	大学院理学研究科教授	森 郁恵	
H19. 2. 5	第23回井上研究奨励賞	大学院理学研究科助手	久原 篤	
H19. 2. 5	第23回井上研究奨励賞	大学院多元数理科学研究科 助手	古庄 英和	
H19. 2.22	社団法人有機合成化学協会 東レ研究企画賞	大学院工学研究科助手	波多野 学	
H19. 3. 2	日本学士院賞	名誉教授	山本 尚	共同研究
H19. 3. 2	日本学士院学術奨励賞	大学院教育発達科学研究科 助教授	近藤 孝弘	
H19. 3. 2	日本学術振興会賞	大学院教育発達科学研究科 助教授	近藤 孝弘	
H19. 3. 2	日本学術振興会賞	大学院理学研究科教授	杉山 直	
H19. 3. 6	Journal of Polymer Science Part B: Polymer Physics Prize for 2007	大学院工学研究科助教授	高野 敦志	野呂篤史（大学院工学研究科D3）、田中信夫（エコトピア科学研究所教授）、松下裕秀（大学院工学研究科教授）と連名
H19. 3. 7	計測自動制御学会 制御部門 パイオニア賞	大学院工学研究科助教授	藤本 健治	

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H18. 8.10	WBS 学生奨励賞	大学院工学研究科 D1	モンゴル バヤルブレブ	山里敬也（エコトピア科学研究所助教授）、岡田 啓（新潟大学助教授）、片山正昭（エコトピア科学研究所教授）と連名
H18. 9. 8	第50回粘土科学討論会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	伊藤 崇倫	笹井 亮（エコトピア科学研究所助手）、伊藤秀章（エコトピア科学研究所教授）と連名
H18.11.10	日本質量分析学会同位体比部会 口頭発表賞	大学院環境学研究科 M1	江口 景子	
H18.11.10	日本質量分析学会同位体比部会 口頭発表賞	大学院環境学研究科 D2	若木 重行	
H18.11.11	経営行動科学学会 第4回学会賞 奨励研究賞	大学院教育発達科学研究科 D2	梅村 祐子	金井篤子（大学院教育発達科学研究科教授）と連名
H18.11.24	第43回日本航空宇宙学会中部・関西支部合同 秋季大会 最優秀学生賞	大学院工学研究科 M2	福島 敦至	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H18.11.24	第31回鳥類内分泌研究会 若手研究奨励賞	大学院生命農学研究科 M2	小野ひろ子	
H18.12. 7	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M2	河原 一憲	小林信介（大学院工学研究科助手）、小林 潤（先端技術共同研究センター助手）、羽多野重信（全学技術センター技術専門職員）、板谷義紀（大学院工学研究科助教授）、森 滋勝（名誉教授）と連名
H18.12. 7	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科研究員	篠田 昌久	山下博史（大学院工学研究科教授）と連名
H18.12. 7	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M1	鳥居 孝洋	松本幸三（大学院工学研究科助手）、崔 奎成（エコトピア科学研究所客員教授）、北川邦行（エコトピア科学研究所教授）と連名
H18.12. 9	第17回日本 MRS 学術シンポジウム 奨励賞	大学院工学研究科 M2	早田 祐貴	永野修作（大学院工学研究科助手）、竹岡敬和（大学院工学研究科助教授）、関 隆広（大学院工学研究科教授）と連名
H19. 1. 5	The 2007 ABR (Business) & TLC (Teaching) Conferences Best Paper Award	大学院情報科学研究科 D3	周 囿	安田孝美（大学院情報科学研究科教授）、横井茂樹（大学院情報科学研究科教授）と連名
H19. 1.17	日本エネルギー学会バイオマス部会ポスター賞	大学院工学研究科 M2	岡田 信彦	小林信介（大学院工学研究科助手）、小林 潤（先端技術共同研究センター助手）、羽多野重信（全学技術センター技術専門職員）、板谷義紀（大学院工学研究科助教授）、森 滋勝（名誉教授）、他1名と連名
H19. 1.17	日本エネルギー学会バイオマス部会ポスター賞	大学院工学研究科 M1	平川 歩	小林信介（大学院工学研究科助手）、小林 潤（先端技術共同研究センター助手）、羽多野重信（全学技術センター技術専門職員）、板谷義紀（大学院工学研究科助教授）、森 滋勝（名誉教授）と連名
H19. 1.31	平成18年度電気関係学会東海支部連合大会奨励賞	大学院工学研究科 M2	岡部 貴博	
H19. 1.31	電気学会 優秀論文発表賞 B 賞	大学院工学研究科 M2	定兼 貴之	
H19. 1.31	電気学会 優秀論文発表賞 B 賞	大学院工学研究科 M2	太田 吉彦	
H19. 1.31	平成18年度電気関係学会東海支部連合大会奨励賞	大学院情報科学研究科 M1	林 由紀子	
H19. 2. 2	2007帝人21世紀フォーラム 敢闘賞	大学院工学研究科 M2	原 光生	
H19. 2.23	愛知県若手研究者奨励事業 第1回「わかしゃち奨励賞」 優秀賞	大学院工学研究科 D3	板倉 剛	
H19. 2.23	愛知県若手研究者奨励事業 第1回「わかしゃち奨励賞」 優秀賞	大学院工学研究科 D3	レニ ユリアティ	
H19. 3. 9	第1回グリーンサステナブルケミストリーアジア・オセアニア会議と第7回 GSC シンポジウムの合同会議 ポスター賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 伸治	

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 全学同窓会と UFJ ニコスが提携し、「名古屋大学 UFJ カード」を4月以降に発行	2.16 (金)	日刊工業
2 東海地方1月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	2.16 (金)	読売
3 トヨタの16年ぶり“班長”役職復活について：山田基成・経済学研究科助教授「高品質やコストダウンを支える人材育成策の意味合いが強いだらう。」と分析	2.16 (金)	中日 (朝刊)
4 「愛知排泄ケア研究会勉強会」18日開催：後藤百万・医学部付属病院教授が「詳解！愛知県高齢者排尿管理マニュアルー排尿管理のロジックを攻略する」と題し講演	2.16 (金)	中日 (朝刊)
5 林良嗣・環境学研究科教授「中部空港の一段の飛躍には、名古屋駅での乗り継ぎの案内を分かりやすくし、また海外に向けた中部の観光情報の発信が必要。」と語る	2.17 (土)	日経 (朝刊)
6 昭和基地設営50年：36次隊隊長・上田豊・環境学研究科教授「良い思い出しかない」と語る	2.17 (土)	中日 (夕刊)
7 「第1回連携医療セミナー」24日開催：「医療ITと脳卒中連携医療」をテーマに医学部脳神経外科と東海ネット医療フォーラム・NPOが共催	2.17 (土) 2.22 (木)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
8 ほとけたちのイメージを探る：宮沼昭・文学研究科教授 オリッサの胎蔵大日如来 長髪で冠飾をつけた仏陀	2.18 (日)	中日 (朝刊)
9 この人 JFE ホールディングス社外取締役に就く 浅井滋生・工学研究科教授	2.18 (日)	中日 (朝刊)
10 馬場勝信・工学研究科教授、太田美智男・医学系研究科教授、ライリー・モウマウディアンさん・本学大学院生ら細菌の遺伝子を3分程度で高感度に検出する技術を開発	2.19 (月)	日刊工業
11 「数理ウエーブ」24日開催：大沢健夫・多元数理科学研究科教授「iは地球を救うのか(その4)…ガウスの整数」と題して講演	2.19 (月)	中日 (朝刊)
12 中日新聞 大学生スタッフが中・高生に大学について出前授業 講師に鈴木絵里さん・本学学生が参加	2.19 (月)	中日 (朝刊)
13 本学 豊田通商と産学連携協定を締結	2.20 (火)	日経 (朝刊) 他2社
14 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 中世の食生活資料 薬だから…野獣も口に	2.20 (火)	中日 (朝刊)
15 時日記：高田浩司さん・本学学生“主夫”の肩書きが受け講演依頼	2.20 (火)	中日 (朝刊)
16 名大サロンの主役：前多敬一郎・生命農学研究科教授 繁殖力より食いが強い	2.20 (火)	中日 (朝刊)
17 「極限水」中性子で探る：奥地拓生・環境学研究科助手「巨大な氷惑星の深部では高压で氷が押しつぶされ、固体の氷なのに内部の水素が自由に動き回る状態にあるはず」とみている	2.20 (火)	朝日 (夕刊)
18 中日文化センター：「町田健の『おもしろ言語学入門』」町田健・文学研究科教授	2.20 (火) 3. 7 (水)	中日 (夕刊) 中日 (夕刊)
19 高等研究院に4月1日から新ポスト「名誉院長」：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別名誉教授と前台湾中央研究院長・李遠哲氏が就任 また、同研究院の次期院長に近藤孝男・理学研究科教授が選出された	2.21 (水)	朝日 (朝刊)
20 「放射性廃棄物地層処分シンポジウム2007 in 中部」2月9日開催：吉田英一・博物館助教授がパネリストを務める	2.21 (水)	中日 (朝刊)
21 時のおもりに：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 納豆騒動が教えること 安易な視聴者への教訓	2.21 (水)	中日 (朝刊)
22 叙位叙勲：従六位瑞宝双光章 白井恒夫・元文学部事務長	2.21 (水)	中日 (朝刊) 読売
23 「在日朝鮮人作家を読む会」25日開催：呉恩英さん・本学大学院生が「金石範『火山島』を読む」のテーマで報告	2.21 (水)	中日 (夕刊)
24 地球ボランティア JICA 青年海外協力隊 マラウイ：古川範英さん・本学学生 子どもの笑顔願う想像力をフル回転	2.21 (水)	朝日 (朝刊)
25 石原一彰・工学研究科教授らのグループは、複雑な化合物を環境に負担をかけずに大量に効率よく作り出すことに成功	2.22 (木)	中日 (朝刊) 他2紙
26 家森信善・経済学研究科教授は、「金利の利上げによって円高圧力がかかり、輸出型の東海経済に影響がでる可能性がある。零細企業には公的支援が必要であろう。」と指摘	2.22 (木)	中日 (朝刊)
27 「名古屋港と防災一津波被害対策を考える」20日開催：鈴木康弘・環境学研究科教授が登壇	2.22 (木)	中日 (朝刊)
28 東海学術奨励会贈呈式：中道治久・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手が代表として助成金を受け取る	2.22 (木)	中日 (朝刊)
29 次期教育学部附属中学校長に植田健男・教育学研究科教授、次期発達心理精神科学研究センター長に森田美弥子・教育発達科学研究科教授、次期アイソトープ総合センター長に饗場弘二・理学研究科教授、次期農学国際教育協力センター長に山内章・生命農学研究科教授が選出された。また、次期生物機能開発研究センター長に小林迪弘・生命農学研究科教授、次期学生相談総合センター長に鈴木国文・医学系研究科教授が再任された。	2.22 (木)	中日 (朝刊) 読売
30 石黒聡士さんら・環境学研究科院生 地殻変動解析を行うために異種の衛星が撮影した複数の写真を使って標高を計測するプログラムを作成	2.22 (木)	朝日 (夕刊)
31 「よりよい高齢社会をつくるために 名古屋大学ライフトピア講演会」28日開催：井口昭久・医学系研究科教授が「健康で豊かな高齢社会を生きる～名古屋大学ライフトピア構想～」と題して講演	2.23 (金)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
32 次期核燃料管理施設長に山根義宏・工学研究科教授が選任された	2.24 (土)	中日 (朝刊)
33 「中高年の息切れ健康フォーラム」3月25日開催:下方薫・医学系研究科教授ら「COPD (慢性閉塞性肺疾患)とは」と題して講演	2.24 (土)	中日 (朝刊)
34 朝日カルチャーセンター:「大宇宙の誕生～『銀河のたまご』からブラックホールの新しい顔まで」福井康雄・理学研究科教授、「縄文の暮らしとマツリ」山本直人・文学研究科教授、「『論語』の味読ー人生の智恵」山下龍二・本学名誉教授	2.24 (土) 3. 9 (金)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
35 「第一回わかしゃち奨励賞」優秀賞にレニ・ユリアティさん・本学大学院生、板倉剛さん・本学大学院生が選ばれる	2.24 (土)	中日 (朝刊)
36 ほとけたちのイメージを探る:宮治昭・文学研究科教授 四面の大日如来座像 光り輝く一切知者の仏	2.25 (日)	中日 (朝刊)
37 書評:「踊る身体の詩学」山口庸子・国際言語文化研究科助教授著	2.25 (日)	読売
38 日本経済研究奨励財団2006年度奨励金の交付対象に奥村隆平・経済学研究科教授「国際経済における枯渇性オープン・アクセス資源の最適管理問題」が選ばれる	2.26 (月)	日経 (朝刊)
39 椿淳一郎・工学研究科教授が世話人を務める粉体工学会中部談話会が企業を対象とした「パウダー・テクノクリニック」を開設	2.26 (月)	日刊工業
40 男女共同参画室主催「科学しようよ!」2月10日開催:伊藤由佳理・多元数理科学研究科講師、山本 智代・工学研究科講師、東村博子・生命農学研究科助教授らによる3つの公開講座が開催 計100人の女子中高生が参加した	2.26 (月)	中日 (朝刊)
41 国立大学二次試験 本学の英語の問題「架空インタビュー」などの軟らかい文章が目立つ	2.26 (月)	中日 (朝刊) 他4社
42 国立情報学研究所と本学など7大学は共同で、全国の大学を結ぶネットワークの共通認証基盤を開発	2.27 (火)	日刊工業
43 研究室発:石原一彰・工学研究科教授 環境に優しい化学を研究	2.27 (火)	中日 (朝刊)
44 「防災フェスタ2007」4日開催:本学と愛知県からなる「あいち地域防災力向上協議会」主催 本学の地震研究者らによるシンポジウムも開催	2.27 (火) 3. 5 (月)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
45 「第14回IODP 大学&科学館キャンペーン (in 名古屋) 講演会」2・3日開催:地球深部探査船「ちきゅう」についての講演が本学博物館で行われる	2.27 (火)	中日 (朝刊)
46 時日記:高田浩司さん・本学学生 30分間に朝食と2人分の弁当	2.27 (火)	中日 (朝刊)
47 きらり:則竹陽介さん・本学大学院生 高校時代の同級生らと路上バンドを続けている 4月からは社会人 歌える社会人を目指す	2.27 (火)	中日 (朝刊)
48 春場所新番付 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 東序二段六十二枚目に昇進	2.27 (火)	中日 (朝刊)
49 健康東海プラザ 特集・医療相談:富田靖・医学系研究科教授	2.28 (水)	読売
50 中部の教育 名大とアジア①:法学研究科の「アジア法整備支援事業」アジアの法曹界担う人材育てる	2.28 (水)	読売
51 この人に聞きたい:舛名大 (田中周一さん・本学学生) 初場所で大活躍 将来の目標は 名大の力を借り関取昇進	2.28 (水)	朝日 (朝刊)
52 「名古屋大遺伝子実験施設公開セミナー『新しいがん治療法の開発を目指してー基礎から応用への研究展開』」9日開催	2.28 (水)	中日 (朝刊)
53 平成18年度 名古屋大学留学生センター オープンフォーラム「(在日) 文学の時代～作家・磯貝治良を迎えて～」25日開催	2.28 (水) 3.13 (火)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊)
54 風戸研究奨励金が藤田秋一・医学系研究科助手「細胞膜脂質マイクロドメイン (ラフト) の定量的解析方法の開発とその応用」、安坂幸師・工学研究科助手「その場顕微鏡法による単一カーボンナノ物質の構造と物性の同時解析」に贈呈された	3. 1 (木)	日刊工業
55 次期情報文化学部長に佐野充・環境学研究科教授が選任された	3. 1 (木)	中日 (朝刊)
56 備える:大災害の際に全国から寄せられる救援物資の扱いが難題 木村玲欧・環境学研究科助手は「被災者にとって何が本当に必要か考えることが大事であり、救援物資のミスマッチは古くて新しい話」と指摘	3. 1 (木)	中日 (朝刊)
57 身近な活断層:林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手 深溝断層 断層境に被害の差顕著	3. 1 (木)	中日 (朝刊)
58 「名古屋都市センターまちづくり」4日開催:溝口常俊・環境学研究科教授が「古地図から読み解く名古屋のまちづくり」の題で講演	3. 1 (木) 3. 6 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
59 稲田利文・理学研究科助教授らは、遺伝子情報を伝達する mRNA に存在するポリアラニン鎖という部分が異常なたんぱく質が生まれるのを防ぐ細胞内のメカニズムを発見	3. 2 (金)	日刊工業
60 あいちホスピス研究会公開講座:井口昭久・医学系研究科教授	3. 2 (金)	中日 (朝刊)
61 愛知県文化財センターによる三の丸遺跡の発掘調査で、那古野城の堀と溝発見:楢崎彰一・本学名誉教授「今回の発見は織田氏が城郭を拡張したことがうかがえる」と語る	3. 2 (金)	中日 (夕刊)
62 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授「全国学力テストは、文科省の行政調査であり個人情報保護法に背く恐れがある。児童生徒を学力テストに参加させることを決めた市町村教委の判断の是非も問われている。」と指摘	3. 3 (土)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
63 「平成18年度名古屋大学総合技術研究会」1・2日開催：全学技術センターが主催し、約750人が参加	3. 3 (土)	朝日 (朝刊)
64 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 卒業研究審査会に臨む：研究テーマ「複合分析装置によるサケ卵細胞中クレオチドの分析」	3. 3 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
65 中日新聞を読んで：外交不在の中の報道とは 中西久枝・国際開発研究科教授	3. 4 (日)	中日 (朝刊)
66 07統一地方選：後房雄・法学研究科教授「無投票区が多い要因を政党の事情にだけ求めるのは一面的だ。ただし、民主党は県議会の多数派を目指すなら擁立を増やすべきだ。」と指摘	3. 4 (日)	朝日 (朝刊)
67 飯嶋徹・理学研究科助教授らの国際研究チームは、高エネルギー加速器研究機構の大型加速器「Bファクトリー」の実験で、離れた場所の2個の粒子が相関状態にある「量子もつれ」をはじめて観測	3. 6 (火)	日刊工業
68 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 本草の家の通信録 立派な父持つ苦勞切々	3. 6 (火)	中日 (朝刊)
69 時日記：高田浩司さん・本学学生 長男は腹ぺこ手早く天津飯	3. 6 (火)	中日 (朝刊)
70 中部の教育 名大とアジア②：留学生との壁なくそう 交流へ学生主導の演習も	3. 7 (水)	読売
71 中日文化センター：「禁断の科学」総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授が講師	3. 7 (水)	中日 (夕刊)
72 溝淵久美子さん・本学大学院生 溝口没後50年—文芸映画を振り返る	3. 7 (水)	朝日 (夕刊)
73 世界腎臓デー：松尾清一・医学系研究科教授「早期発見で治療科可能な病気であり、早期発見・予防の重要性を広めたい。」と語る	3. 8 (木)	毎日 (朝刊)
74 本学8日 前期日程合格発表	3. 8 (木)	毎日 (朝刊) 他3社
75 東村博子・農学研究科助教授と山田俊児さん・本学大学院生らのグループが授乳が生殖機能を抑制するというメカニズムを解明	3. 9 (金)	中日 (朝刊)
76 医学部附属病院は、年内をめどに名古屋市内の診療所と電子カルテのネットワークを結ぶシステムを構築する	3. 9 (金)	中日 (朝刊)
77 朝日カルチャーセンター：「ヨーロッパ絵画の図像学」木俣元一・文学研究科教授	3. 9 (金)	中日 (朝刊)
78 東海地方2月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	3. 9 (金)	読売
79 「名古屋学生映画祭」17・18日開催：本学も参加	3. 9 (金) 3.15 (木)	朝日 (夕刊) 毎日 (朝刊) 日経 (夕刊)
80 本学 産総研と、研究開発や人材育成において協定を提携	3.10 (土)	日刊工業 他4紙
81 渡辺俊樹・環境学研究科助教授：地面をわずかに揺らし続けて、地下から反射してくる地震波を高感度の地震計でとらえる「アクロス」という新システムで観測計画を進める	3.10 (土)	朝日 (夕刊)
82 家森信義・経済学研究科教授「短プラ引き上げで直ちに企業向けの貸出金利はあがらない。ただ企業の規模で明暗もあることが考えられる」と指摘	3.10 (土)	読売
83 弁護士過疎地域の解消を目指す NPO 法人「ロースクール奨学金ちゅうぶ」の学費の支給を受ける奨学生として、鈴木禎司さん・本学法科大学院学生が選ばれる	3.10 (土)	中日 (朝刊)
84 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 猪に乗る摩利支天 暗黒に光り輝く女神	3.11 (日)	中日 (朝刊)
85 政務調査費について：小野耕二・法学研究科教授「使途を裏付ける領収書の公開を求めたい」と指摘	3.11 (日)	読売
86 「第47回全日本学生ライダー競技選手権大会」：本学初優勝	3.12 (月) 3.13 (火)	朝日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
87 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 広島藩の産物帳 召し上げ恐れ改ざんも	3.13 (火)	中日 (朝刊)
88 時日記：高田浩司さん・本学学生「妻がもし…」不安を感じる	3.13 (火)	中日 (朝刊)
89 尾関雄一朗さん・本学学生 名古屋競馬の小山信行騎手にインタビュー「スタートは遅くとも、道は開ける」と実感	3.13 (火)	中日 (朝刊)
90 「シンポジウム津波—その衝撃と全貌」：インドネシア・ジャカルタ大の学生や本学の地震研究者がパネルディスカッションを開く	3.13 (火)	中日 (朝刊)
91 再生医療に携わっている上田実・医学系研究科教授と医療ベンチャーのTSE ホールディングスは、線維芽細胞による皮膚再生を各地でフランチャイズ展開する計画	3.13 (火)	中日 (夕刊)
92 鍋島俊隆・医学系研究科教授や、丹羽美苗さん・本学大学院生らのグループは、白血病薬の類似化合物が薬物依存を緩和することを発見した	3.14 (水)	中日 (朝刊)
93 中部の教育 名大とアジア③：日本語でも法整備支援 ハノイなど現地に拠点センターを設立	3.14 (水)	読売
94 科学と非科学：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授「中立」踏み越え警告を	3.14 (水)	毎日 (朝刊)
95 吉川卓治・教育発達科学研究科助教授 公教育と経済格差 学校選択制で地域の弱体化を懸念	3.14 (水)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
96 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 故郷への念これからも	3.15 (木)	朝日 (朝刊)
97 「子どもと教育の未来を考える講演会」：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授が「教育基本法『改正』で学校・教育はどう変わるかー憲法で守る、憲法を守るー」と題して講演	3.15 (木)	中日 (朝刊)
98 訃報：北川泰雄・生命農学研究科教授	3.15 (木)	中日 (朝刊) 他3社

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月7日(土)、14日(土)、21日(土)、28日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：13時00分～16時00分
定 員：20名(初心者向け)
参 加 費：1,000円

ボタニカルアート(植物細密画)講座(4回連続)



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月18日(水)、5月29日(火)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール
時 間：18時00分～19時30分
入 場 料：無料

第28回防災アカデミー

講演題目：「災害時緊急報道で活躍する放送システム」
講 演 者：小嶋 富男(前NHK災害センター長)



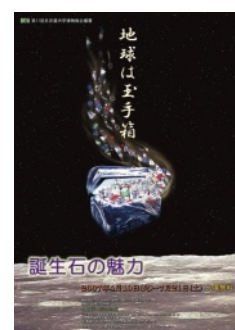
[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038

4月10日(火)～7月21日(土)

場 所：博物館
時 間：10時00分～16時00分
入 場 料：無料
休 館 日：日・月曜日

第11回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：「地球は玉手箱～誕生石の魅力～」



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月27日(金)、5月12日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：15時00分～16時30分
入 場 料：無料

第68回名古屋大学博物館特別講演会

講演題目：「シリカ鉱物から地球史を読む」
講 演 者：水谷伸治郎(本学名誉教授)

第69回名古屋大学博物館特別講演会

講演題目：「名古屋大学によるアフリカ大陸の地質調査研究、1962～2006」
講 演 者：星野 光雄(環境学研究所教授)
共 催：日本応用地質学会中部支部

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

5月14日(月)、15日(火)

場 所：国際開発研究科8階第1会議室
時 間：9時00分～16時00分

IATSS フォーラムセミナー

内 容：研修生事前調査発表+ Q & A、「教育」テーマ講義、グループディスカッション

[問い合わせ先]
国際開発研究科
北村 友人助教授 052-789-4969

5月19日(土)

場 所：知多半島磯ヶ浦海岸
時 間：8時20分～16時00分
定 員：40名
参 加 費：500円(保険料)

中学生のためのネイチャーウォッチング

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

6月1日(金)

場 所：名古屋銀行協会銀行倶楽部

時 間：18時00分～20時00分

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

経済学研究科

附属国際経済政策研究センター

052-789-494

名大 ERC・キタン会

名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「アジアの発展と日本経済（仮題）」

講 演 者：原田 泰氏（大和総研チーフエコノミスト）

名大トピックス No.167 平成19年4月17日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

庄内川で行われた名工大
戦の様子。

（漕艇（ボート）部）

（平成19年3月25日）



60 名古屋帝国大学初代総長澁澤元治関係資料

澁澤元治（1876－1975）は、「日本の近代資本主義の父」といわれる澁澤栄一を叔父にもつ人物で、戦時下の多難な時代に創設された名帝大の初代総長（1939－1946）として、草創期本学の基礎づくりに尽力しました。

澁澤は、東京帝国大学工科大学（電気工学科）を卒業後、叔父栄一に随行して欧米を外遊し、帰国後は逓信省に勤務しました。この逓信省時代に工学博士学位を取得し、のちに東京帝国大学教授を兼任しながら逓信省電気局技術課長に任命されていた時期もありました。

澁澤の生涯等については自著『五十年の回顧』（1953）・『思い出の随想』（1974）のほか、手近なものとしては大学文書資料室発行の名大史ブックレット6（デジタルブック版・冊子版）などで知ることができます。

1955（昭和30）年、澁澤は電気事業行政および電気工学技術の研究教育における功績が評価されて、電気関係者として初めて文化功労賞を受賞しました。この受賞を契機に

有志によって「澁澤元治博士文化功労賞受賞記念事業委員会」が設置され、翌56年に「澁澤賞」が創設されて今日に至っています。

澁澤元治の没後10年にあたる1985年、ご遺族が深谷市の澁澤生家敷地内に、日本語教育や国際親善などを目的とした外国人留学生のための「澁澤国際学園」が開校しました。そしてこの学園のなかに「澁澤元治記念館」が設置され、澁澤元治が生前使っていた机・椅子などの品々や蔵書・アルバム・書簡などが保存展示されていました。

その後、同記念館はご遺族が他界されたこともあって、2000年の春に閉館となりました。閉館後、残された資料の保存管理が問題となりましたが、多くの関係者の協力もあって2001年3月にその資料が名古屋大学に寄贈されることになり、現在は大学文書資料室がその管理を行っています。なお、大学文書資料室では、今年度からこの澁澤関係資料の一般公開を行っています。



2

1 | 3 | 4

- 1 名大史ブックレット6
(デジタルブック版は<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/booklet/>)
- 2 「澁澤元治記念館」看板（たて約50cm×よこ約180cm）
- 3 澁澤元治記念館内の展示のようす
- 4 大学文書資料室に移管された澁澤元治関係資料（一部）